
遊戯王GX～HERO's Fellows～

アトラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

デミアを舞台に繰り広げられる学園物語である。

第01話 もう1つの英雄（前書き）

始めまして、アトランです。駄文なところも多々あると思いますが、よろしく願います。

それでは早速、HERO'S FELLOWS、始まります。

第01話 もう1つの英雄

生き物の一生に置いて、終わりは常に側にあり、同時に遠くにあるものである。それは、いつ、どこで現れるかは、誰にも分からない。これは、ある日唐突に終わりを向かえ、なぜか第2の人生を歩むことになった少年の物語である。

(?視点)

…?この白い空間なんだ…あ、夢か?よくある夢か。よし、夢ならとつとと覚める…?なんだこの紙…へ?自己紹介しろ?…誰もいないのに自己紹介しろ?というより誰だ?この紙置いたの…。

?また紙…いいからやれ。やったらいい特典付けるぞby作者…仕方ないな。オレの名は流明遊夜^{しゅつみゆうや}。転生する前は勇夜つて書いたけど、こつちにきたらなぜかこうなっていた…。それとオレは転生者だ。でもオレTRUEEEEE!は無理。

そもそも転生する前でもデュエルの腕微妙だからいきなり強くなつたら自分が怖くなる…まあ、転生した世界がアニメの遊戯王で、時代がDMで、今GX時代周辺だから少し助かった点があるからな。5Dsの時代に転生したら多分遊星やジャックに勝てない。でも、GXだから最強のドロー運の持ち主である十代と、積み込んでいるんじゃないのかと思うくらい十代同様最強のドロー運を持つ丸藤亮がいるからそこが問題だからな。

そうそう、オレのデッキについて紹介しよう。オレのデッキは…？
ジリリリリ…？…ベタな目覚めパターンだなおい…。

(作者視点)

ジリリリリと、目覚ましが鳴り、1人の人物がふとんの中から手を伸ばし、目覚ましを止めようとしている。その人物は、女のような男のような、中性的な顔立ちで、髪は、枕の下に隠れているが、ある程度長いと予想できる。

また、おそらく立ち、前から見れば右側に3つの薄紫色の線が入っており、枕の下の髪に、髪が隠れているが、ある程度まで続いていると思われる。

その人物が、目覚ましを止めるのに苦戦していると、部屋の扉が開いた。そこには薄紫色のストレートの長髪で、黒目の、とてもスタイルの良い美女が立っている。その美女がその人物を見て、息を大きく吸い込み、そして…。

「遊夜！！とつとと起きなさい！！！！」

そういうと、彼女はふとんを取り払い、目覚まし時計をすばやく止めた。ふとんの中にいる人物は…おそらく男であろう。髪は長いが、男であろう。胸がないからではあるが、推測の範囲に留まっている。

「遊夜！早く起きなさい！！遊夜！！遊夜！！！！」

「ん…ん…お袋おはよう」

「おはようの前に、何時だと思っているの！！」

「え…」

そういうと遊夜と呼ばれた人物は、目覚まし時計を見た…その時刻

「（ん？まさかとは思うが…）」

遊夜がそう思い始めた途端、遊夜の心を読んでいたかのように、駅にアナウンスが流れた。

「大変申し訳ありませんが、事故により、電車の到着時刻が遅れています。繰り返し、お伝えします…」

「（やっぱりいいいいいいいい！！！！）」

遊夜は、予想が的中し、心の中で絶望の叫び声を上げた。電車が到着したのは、それから10分ほど経った後であった。

「（もしかしたらまだ間に合うかもしれないもしかしたらまだ間に合うかもしれないもしかしたらまだ間に合うかもしれない）」

その後、電車を降り、駅から出ると、そう思いながら走っている。幸い、人通りは少なく、走りやすい状態である。

「！よし、ラスト・スパート！！！」

遊夜は、ある建物を見ながらそう言った。それはドームのようである。どうやら、遊夜の目的地は、あの建物のようにある。そして、遊夜が再び視線を前に戻すと、10mほど前に、人が歩いている。

「！退いて下さい！！！！！」

遊夜は急いで止まろうとしながら、前を歩いている人物に叫んだ。
ほぼ目の前にその人物が迫ったが、ぶつかるとはなかった

「へび！…いてて」

…遊夜自身が、ギリギリのところまで転んで、幸い前の人物には被害はなかった。だが…。

「な、なんとか止まれた…ああああ！！で、デッキが…！！！」

そう、遊夜が転んだ衝撃で、デッキが、デッキケースから飛び出したのである。路上にはカードが散らばっている。幸い、遊夜と前を歩いていた人物以外に人はいなかったため、カードが踏まれることはなかった。

「やばい…！！！」

「…手伝おう」

「だ、大丈夫です！オレのせいですから！！！」

「困ったときはお互い様だ」

そういうと、その人物は遊夜のカードを、遊夜と共に拾い始めた。カードを全て拾い終わり、遊夜はその人物に連続で頭を下げている。

「ありがとうございます！ありがとうございます！！！」

「気にするな。カードは大事だからな」

彼はそう言っではいるが、遊夜はまだ頭を下げている。すると、彼は、ん？という顔をした。そして、彼は遊夜の肩を叩いた。遊夜は、不意に叩かれたため、少し驚いた。

「ラッキーカードだ。このカードが、君の元へ行きたがっている」

「へ？い、いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます！！ありがとうございます！！！！」

再び、遊夜は連続で頭を下げ始めた。彼は微かに笑い、遊夜に重要なことを言った。

「君は、そうとう急いでいたんじゃないのか？」

「…し、しまったー！！！！！！！！ありがとうございます！！！！」

遊夜は頭を上げ、叫ぶと、再び頭を下げ、走り去っていった。彼が、遊夜に渡したカードを、デッキケースにしまい…。

「…これからが楽しみだな」

彼はそういうと、再び歩き始めた。

「おおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

遊夜は必死の形相で走っている。そして、目的地の入り口についた。受付と思われる場所には、1人のサングラスの男性がいる。

「ん？君は？」

「受験番号58番、流明遊夜。電車の事故の影響で遅れてきました
！！！！」

「君もか…なら、急いだほうがいい。君と同じように遅刻してきた子がデュエルをしているが、もうすぐ終わるかもしれない」

「……さすがに痛いかな……。それで……オレとデュエルする教官は……」
「ワタシナノーネ。このクロノス・デ・メディチがデュエルするノーネ」

「（クロノス先生が相手……か。不足はない）分かりました」

（遊夜視点）

クロノス先生が相手……なんか見たことあるぞこのパターン……そういえば、さっきのヤツどこいった……見覚えあるんだけど……。まあいか。オレはデッキケースからデッキを取り出すと、シャッフルしてデュエルディスクにセットした。

クロノス先生のほうを見ると、デュエルディスクとコートが一体化している珍しいディスクにデッキをシャッフルしてセットした……お、なかなかかっこいいな。

「それでは、デュエルを開始するノーネ」

「！は、はい」

……デュエルするってこと忘れて見入ってた……クロノス先生もう手札引いてる。急いでオレは手札となる5枚をデッキから引いた。

「『デュエル！』」

遊夜 LP4000 手札5 クロノス LP4000 手札5

さあ、デュエルスタートだ。オレのデッキ、なめて貰ったら一気に……。

「先攻は譲るノーネ（このドロップアウトを倒して、名誉挽回ナノーネ）」

「え？いいんですか？」

…さっそくなめられたか？さっそくなめられたのか？？まあいいか。

「それじゃ、ドロー」

引いたのは…強欲な壺か。オレも案外、ドロー運があるみたいだな。

「手札からマジックカード、強欲な壺を発動。その効果で、デッキからカードを2枚ドロー」

ドローしたのは………？彘？？あれ？おつかしいな…こんなカード入れたっけ…入れたっけオレ……その前にこのカードこの時代にあつていいのか？……まあいいや。

「E・HEROフォレストマンを、守備表示で召喚！」

オレがディスクにカードを置くと、半身が木で出来た、肌が明るい緑色の男が現れた……そう、オレのデッキはE・HERO。漫画版の十代寄りのデッキだ。それじゃ、さらに…。

「手札からHERO'sボンド発動！オレの場にHEROが存在している場合、手札のレベル4以下のE・HEROを2体、特殊召喚できる。オレは、E・HEROレディ・オブ・ファイアとE・HEROワイルドマンの2体を、守備表示で特殊召喚！」

フォレストマンから光の線が2つ出ると、白いタイツを着た少女と、上半身裸で禪をつけた野生児的な男が現れた。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。そしてエンドフェイズ、E・

HEROレディオブファイアの効果発動！自分フィールド上の表側表示のE・HEROの数×200ポイントのダメージを、相手ライフに与える。

オレの場にはレディ・オブ・ファイアを含めた3体のE・HEROがいる。よって、相手ライフに600ポイントのダメージ！ファイア・バレット三連射！」

レディオブファイアの周りに3つの火の玉が出て、それがクロノスへと飛んでいった。…事前に言っておこう、これはソリッドヴィジョンだ。人がケガをするようなシステムはない。例外はあるかもしれないがケガをするようなシステムではない。温度を感知するシステムはないはず。

クロノス LP4000 3400

「熱い！熱いノーネー！」

…なんでこうなるんだ？なんで熱いんだ？クロノス先生には分からないことが多い…。

遊夜 手札1 LP4000

モンスター E・HEROフォレストマン×1(守)、E・HEROレディオブファイア×1(守)、E・HEROワイルドマン×1(守)

魔法・罫 セットカード×1

「それではワタシのターン、ドロー…」

…クロノス先生がにやけた…いきなり来るか。

「ワタシは手札からマジックカード、強欲な壺を発動。その効果で、デッキからカードを2枚ドロ。さらに、二重召喚を発動。これでこのターン、ワタシは2回まで、通常召喚できるノーネ。ワタシは、トロイ・フォースを召喚」

クロノスがカードを置くと、木で出来た木馬が現れた。あのカードはたしか…えーっと…。

「トロイ・フォースは地属性を生け贄召喚する場合、2体分の生け贄にすることができるノーネ」

！そ、そうそう、その効果だ。…あれ？たしか、クロノス先生のデツキって…。

「ワタシは、トロイ・フォースを生け贄に…古代の機械巨人を召喚するノーネ！」

「やば！使うカードは違うけど、オレのターン入れて2ターンで古代の機械巨人を…まさに、GX第1話のデュエル展開！…あ…ラッキ

「それでは「それじゃあ相手ターンのメインフェイズ、エフェクト・ヴェーラーを墓地へ送って、効果発動！効果対象を、古代の機械巨人に」？！な、なんナノーネそのカードハ！？」

エフェクト・ヴェーラー…何故か手札に来ていたカード。まるで、この状況を読んでいたみたい…まさかな。オレがそう思っている

と、半透明のエフェクト・ヴェーラーが現れた…？一瞬オレのほう

みたような…まあいいか。

エフェクト・ヴェーラーが古代の機械巨人に光を当てた…うん、特

に変化はないな。

「…何かと思えば何も無いノーネ。ただの使えないカードナノーネ」
「それでもないんだけどな…転生前でよく助けられたからな」。エフ
エクト・ヴェーラーのお陰で逆転できたこともあつたし。

「そう言っていると、足元をすくわれますよ」
「そんな訳ないノーネ！バトル！！アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人で、そのさつき
のドロップアウトボーイとは違うけれど、ペラペラなコミッ
クヒーローのレディオブファイアを、攻撃ナノーネ！アルティメッ
ト・パウンド！」

アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の拳が、レディオブファイアに迫った。だが、甘い！

「それじゃ、エフェクト・ヴェーラーの恩恵、見せてあげます！リ
バースカード、オープン！くず鉄のかかし！！相手モンスター1体
の攻撃を無効にし、再びセットする」

「甘いノーネ！アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の効果で、このカードが攻撃すると
き、相手はダメージステップ終了時まで、マジック・トラップカー
ドを発動できないノーネ」

「残念、エフェクト・ヴェーラーは、相手ターンのメインフェイズ
に手札から墓地へ送ること、相手モンスター1体の効果を、エン
ドフェイズまで無効にする！」

「…ば、バカーナ！！！」

レディオブファイアの前に、ジャンクパーツで出来たカカシが現れ
て、アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の拳を受け止めた。

「くうくカードを2枚伏せて、ターンエンドナノーネ（セットカー

ドは聖なるバリアーミラーフォースに収縮。問題ないノーネ」

クロノス 手札2 LP3400

モンスター アンティーク・ギア・ゴレム 古代の機械巨人×1

魔法・罫 セットカード×2

「オレのターン、ドロー！」

…よし！このターンで決める！！

「E・HEROフォレストマンの効果！このカードが表側表示のときに、自分のスタンバイフェイズに、デッキ、または墓地から、融合を手札に加える。デッキから、融合を手札に！」

フォレストマンから緑色のオーラが放たれた。オレはデッキから融合を手札に加えた。次はつと…。

「手札からマジックカード、E・エマージェンシー・コールを発動！このカードは、デッキからE・HEROを呼ぶマジックカード…その効果で、E・HEROエアーマンを手札に！」

さあ、ショータイムの始まりだ！オレは手札にエアーマンを加えると、手札を持っていないほうの手を上へ上げた。そして、指をこすりつけ、鳴らした。

「イツツ、ショータイム！手札からE・HEROエアーマンを召喚！エアーマンには2つの効果がある。1つ目は、自分フィールド上のこのカード以外のHEROの数だけ、魔法・罫カードを破壊する。2つ目はデッキからHEROをサーチする効果」

「な…ま、まさーか…」

「オレは、1つ目の効果を使用する！破壊するのは、オレのセットされたくず鉄のかかすと、クロノス先生のセットカード2枚！ターボ・ストリーム！！」

エアーマンのタービンから竜巻が発生して、全てのセットカードを吹き飛ばす！ヒュー、大迫力。

「その効果にチェーンし、速攻魔法、収縮を発動するノーネ！その効果で、エアーマンの攻撃力を半減するノーネ！」

エアーマンの前に鏡が出てきた…その鏡を見たエアーマンの体が、半分くらいの大きさまで小さくなった…あんな感じに小さくなってたっけ？ま、いっか。それでもう1つは…げ、聖バリ！エマージェンシー・コールがエアーマンかライト・ジャスティスが来なかったら危なかった。

E・HEROエアーマン ATK 1800 900

「…デスーガ、ワタシーの場にいる古代の機械巨人アンティーク・ギア・ゴレムの攻撃力と守備力は共に3000！そんなペラペラなコミックヒーロー如きじゃ、倒せないノーネ」

「なら、見せてあげますよ。オレのE・HEROを！手札からマジックカード、融合！エアーマンと、フォレストマンを融合！」

融合の渦が出てきて、その中にエアーマンとフォレストマンが吸い込まれた…今回出すのは、こいつだ！

「こい！E・HERO GreatTORNADO！！」

渦から、黒いマントを羽織って、明るい緑と、黒の2つの色で出来

たタイトによく分からない装備を付けたHEROが現れた。

「！だ、ダケドモ、攻撃力は2800。ギリギリ、ワタシーの古代アンティの機械巨人イクキア・ゴーレムのほうがギリギリ上ナローネ！」

「残念、E・HERO GreatTORNADOが召喚に成功したとき、相手の表側表示モンスターの攻守を半減させる！タウン・バースト！！」

<small>アンティク・ギア・ゴーレム</small> 古代の機械巨人	ATK	3000	1500	DEF	3000
1500					

「ば、バカーナ！ワタシーの古代アンティク・ギア・ゴーレムの機械巨人が、たった1500に！？」

「他のE・HEROを攻撃表示に変更してバトル！E・HERO GreatTORNADOで、古代アンティク・ギア・ゴーレムの機械巨人を攻撃！スーパー・セル！！」

グレイトルネードが竜巻になって、そのままゴーレムに突撃した。さすが名前にトルネード付くだけあるな。って思ってる間に、ゴーレム破壊されたな。

クロノス LP3400 2100

「そして、レディ・オブ・ファイア、ワイルドマンの2体で、ダイレクトアタック！！ダンシング・ファイア！！ワイルド・スラッシュ！！」

レディ・オブ・ファイアがいくつかの火の玉を投げ、ワイルドマンが背負っている剣で切り込んだ。

「ペペロンチ〜ノ!!」

クロノス LP2100 8000

勝てた〜!つと…いつものヤツつと。

「ナイスデュエルでしたよ、クロノス先生」

これがオレのデュエル後決め台詞!クロノス先生に出来た〜!

「くう〜マサーカ、このワタシーが、ドロップアウト如きにまた負けるとは〜」

…今、気づてならない言葉聞こえたぞ…ま、勝ったからいいか。

第01話 もう1つの英雄（後書き）

第01話、どうでしたか？

誤字、脱字、指摘、感想をドシドシ受け付けております。

第02話 VS万文目の取り巻き（前書き）

第2話にて、私が考えるこの小説の中に登場してくるオリキャラの中で、メインの1人であるオリキャラが登場します。それでは、どうぞ。

第02話 VS万丈目の取り巻き

(遊夜視点)

オレは正直、GXで無双できる訳がないと、思っていた。カイザーや十代、それに万状目や明日香にシスコン吹雪までいるから、無双できる訳がないと思っていた……その予想は的中した。何故なら……。

「…なんでこの2時間と30分ぐらいで十代に15連敗してんだろオレ……」

「んつと…わりい」

デュエルアカデミアに到着…というより試験会場で十代や翔、三沢には会って、十代とデュエルする約束して、船で1回デュエルして勝ったけど、アカデミアについて、校長の話スルーして、制服受け取ったらレッドでヤッターと思ってたら3時間後ぐらいにこれぐらいの絶望してるからな…どうなってんだよあいつのデッキ…。

1つのパターンだが、オレのターン、適当なE・HERO攻撃表示で召喚、2枚セット、エンド。十代のターン、ドロ。ヒーロー・アライブ、バーストレディ or フェザーマン特殊召喚、召喚しなかったほうを手札から召喚、R・ライト・ジャスティス、オレのセットカードフリーチェインじゃない。

全破壊、融合、フレイム・ウイングマン、巨大化、フレイム・シュート、バーン効果でバーンと終了…このパターン多いぞ！

というより、なんでヒーロー・アライブ使ったんだ？！十代なんで持ってる！！？オレサイド入れてるけど…。というよりどういうドロ運してんだよ！このパターン15回中6回ぐらいあったぞ！！オレが召喚するヤツ違ったけど、それでも守備貫持たせてトドメがあったぞ…！！

「十代…お前、どうなってるんだ??」

「んつと…さあ」

「とにかく…アニキすごいっす」

「たしかに…十代すごいんだな…」

「ま、まあな…遊夜、大丈夫か?」

「…大丈夫だったら、体育座りしないから…」

フッフ…そうか、これが絶望か、これが絶望なのかアポリアよ…。

…絶望他にもあるけどよお…これも絶望なのか…。フッフッフ…。

「ゆ、遊夜?!いきなり笑い出してどうしたんだよ遊夜!?!」

「流明君しつかりするっす!」

「しつかりするんだなあ!」

十代に翔に隼人…オレに構うな。どうせオレなんか…どうせオレなんか…。

「そ、そうだ!これから、デュエルリングにいくっす!パンフレットに場所載ってるから、行ってみるっす!」

「そ、そうだな!行こうぜ、遊夜!」

十代に翔、そういう気休めはよしてくれ…どうせオレは十代に勝てない男ですよ…だ…。

「と、とにかく気晴らしに行くんだな。きっと、気が変わるんだな」

「…そうする」

…十代やカイザー以外ならオレ…結構勝率あるような気がする…うん、多分ある。多分結構あるはずだ…。オレはそう思いながら、足

取り重く、翔や隼人の案内で、デュエルリングへと向かった。

デュエルリングへと着くと……知っているが、先客がいた。オレたちを見ると、先客のうち2人が、オレたちに絡んできた。

「おい、ここに何のようだ」

「ここは、お前達のようなクズレッドのくる場所じゃない」

……イライラしてきた……オレはアニメの遊戯王デュエルモンスターズの中でも、DM時代の虫野郎と、GX時代の一部のオベリスク・ブルーと、5Ds時代のリアリスト他が嫌いだ。その中でも特に、オベリスク・ブルーの中でも、特に実力もないのに威張り散らすブルーは特に大嫌いだ。

「オレたちはデュエルしに来ただけだぜ」

「お前等バカか？ここは、オベリスク・ブルー専用のデュエルリングだ。あれを見る！」

1人が大声でいい、指で何かを指した……オベリスクの顔か。……趣味悪……このオーナーがデザイン頼んだな多分。

「そんなの関係ないだろ！」

「関係あるんだよ。とにかく、お前等のような……ん……よく見たら110番と58番！」

58番……オレの受験番号で合っているな。オレと十代目立っただろうから別にいつか。

「お前達、何をしている」

「あ、万丈目さん!!」

…サンダーの声聞こえた。サンダーの声聞こえた。万丈目サンダーの声聞こえた。うん、いるね、万丈目。確認すると…予想通りサンダーがいます。

「貴様らは110番と58番!」

「名前で覚えたほうが早くない?」

「名前を知らんから無理がある」

「つていつかアンタ誰?」

十代ナイス質問。オレ知ってるからあんまり質問するのはちょっと気が引ける。

「お前達、このお方を知らないのか!?!」

「中等部を主席で卒業した、未来のデュエルキングと呼び名高い万丈目準さんだぞ!」

「未来のデュエルキングか!?!すっげー!?!」

「いや十代、まだ決まってないから」

「そういうもんか?よーしとりあえず…万丈目、デュエルしようぜ!」

…え?今の状況でそれ言える?それよく言えるよね…まあ、ある意味十代らしいっちゃらしいけど…。

「万丈目さんだ!お前のようなレッドとデュエルするつもりはない…と、言いたいところだが、いいだろう。オレとお前、どちらが強いかわかめてやる!」

そういつて、万丈目はディスクを構えた。…なんだろ、何か違和感

が若干あるような無いような…。とにかく、デュエルが始まるのか？そう思った矢先、また別の声が聞こえた。

「あなた達、何をしているの!？」

「誰が何してるの!後レツドの人、ここよくブルー生いるからややこしいことになるから注意って、もうなってるか」

…予想したのは天上院明日香だけなんだけど、登場を予想したのは天上院明日香だけなんだけど、もう1人の女子何？灰色の髪をポニテールにしているけど…。とりあえず何？灰色ポニテの人。

「!お、お前たち、行くぞ」

「え？は、はい」

「分かりました」

そう言つて、万丈目と取り巻き2人がデュエルリングを出た…なんだか苦虫潰したような顔だけど大丈夫か…？気になっている間に、天上院さんと灰色ポニテの人が近づいてきた。

「ここはブルー用のデュエルリングだから、ブルーの生徒がいることが多いから、あまり近づかないほうがいいわよ」

「ま、さつきみたいなおことになるから、要注意ね」

「まあ、気をつけるぜ。それで、お前ら名前は？」

「出来れば先に名乗ってもらいたいものね…天上院明日香よ」

「黒夜日菜よ。よろしく」

「おう。オレは遊城十代。よろしくな」

「丸藤翔つす」

「前田隼人なんだな」

「流明遊夜です」

黒夜さんか…。原作にはいなかったけど…やっぱり、オレ達がいるからかな…それとも、彼女も転生者だったりして…そんなことを思っている、天上院さんがもうすぐ歓迎会の時間ということを知っていたレッド組のオレ達は、急いで戻った。

「…十代、1つ言ってもいい？」

「何を言うんだ？」

「この食生活って…かなり貧乏だよな」

現在進行形で歓迎会での食事中です。ちなみにテーブルは4人席で、オレ、十代、翔、隼人が座っている。レッドの待遇が非常に悪いということは知っていたけどさあ、知っていたけどさあ、食事ぐらい普通にしようよ！

「たしかにかなり貧乏っす…」

「そうか？それにしても、カレーうめえー！」

「まあ…貧乏なのはいつものことなんだな」

「アハハハ…」

現在、オレは自分の部屋にいる。部屋割りには十代達とは違う部屋になった。2人部屋…っていうか予想だとレイちゃんオレのところ来そうなんだけど…。まあいいや。

オレがデッキを確認しようとデッキケースに手を伸ばしたら、PD Aから着メロが流れた。ちなみに流れたのはGX第3期オープニングテーマ。結構いい歌だから着メロにしてるんだよね。とりあえず、メールが来たみたいだから手に取ってみた…ティ・ロップ聞いた後なのに何故かサンダーの音が聞こえた。

「やあ、58番。午前0時にデュエル場で待っている。お互いのエースカードを賭けたアンティールルだ。勇気があるなら来い。それとも、ビクビク震えて怯えるのも、いいだろう」

うわ〜むかつく〜叩きのめして〜。よし、とりあえずレッツゴー。

なんとかガードマンに見つからず、指定された時間に、デュエル場につくことができた。十代も呼ばれたから、一緒に来た…おまけで翔も。無論、デュエル場には万丈目とその取り巻き2名がいる。

「逃げ出さすに来たな。言葉通り、アンティールルでデュエルを行う。手加減したクロノスに偶然にも勝ったお前たちの強さを確認しようではないか」

「へへ、あれは実力さ!」

「ま、そういうところ。それより、序盤から切り札だした時点で加減なんてしてないよ」

「ふん、まあいい。遊城十代、お前はオレとデュエルしろ。流明遊夜…お前は…」

「万丈目さん、あいつはオレがやります!」

「好きにしる」

…オレは取り巻きと…か。まあ、別にいいかな…今回は、エースを召喚できるかもしれないし。オレがそんなことを考えていると、足音が聞こえてきた。…もしかして、ガードマン来ちゃった?来たのは、天上院さんと…黒夜日菜さん…なんているんだろ。

「アナタ達、この時間帯でのデュエルは禁止されているはずよ!」

「何やってるんだか…まあ、いいや」

「…まあとりあえず…徹底的に叩きのめすだけだから」

そういうとオレはディスクにデッキをセットし、ディスクを起動させた。

「それじゃ、さっそく始めようか」

「け、お前みたいなヤツなんざ、オレが楽に倒してやるぜ!!」

相手も、デッキをシャッフルして、セットした…うん、それが一番かな。そのままセットしたらオレ何か言ってただろうし。

「デュエル!!」

取り巻きA 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「オレのターン、ドロー!ゴ布林突撃部隊を召喚!さらに装備魔法、魔導師の力を装備!これでゴ布林突撃部隊の攻撃力と守備力は、オレの魔法・罠カードゾーンのカードの数だけ、500ポイントアップする!!」

ゴ布林突撃部隊 ATK 2300 DEF 2800
500

…うわ…先攻取られた…うわ…取られた…。

「これでターンエンドだ!どうだ!お前程度に、この布陣が突破できるものか!!」

取り巻きA 手札4 LP4000

モンスター ゴ布林突撃部隊×1(攻)

魔法・罠 装備魔法「魔導師の力」×1(ゴ布林突撃部隊に装備)

「オレのターン、ドロ―…1つ聞くけど…その程度？」
「は？」

「攻撃力2800…その程度なら、突破は簡単だけど」
「な、なんだと!？」

まあ…攻撃力3500なら、突破は難しくなるけど…攻撃力2800、しかも守備力は低い…この程度なら、勝てるかな。

「確かに…攻撃力2800なのはいいけど、セットカードがないのは、不利ね」

「まあ、別に問題ないだろけど…守備力低いゴブ突だし」

「と言うわけで、ゴ布林突撃部隊は倒させてもらおうよ。速攻魔法、エネミー・コントローラーを発動!エネミー・コントローラーは、自分のモンスター1体を生け贄にすることで、相手モンスター1体のコントロールを得るか、表側表示の相手モンスター1体の表示形式を変更する。オレは、ゴ布林突撃部隊の表示形式を変更!」
「な!し、しまった…」

コントローラーが現れると、ケーブルがゴ布林突撃部隊の1体に接続されると、ボタンが押され、守備体制を取った。

「手札からE・HEROフォレストマンを召喚!バトル!フォレストマンで、ゴ布林突撃部隊を攻撃!ウッド・アーム」

オレの場に、緑色の肌をして、頭と首以外の半身が木でできたHEROが現れた。オレが攻撃宣言をすると、フォレストマンがゴ布林突撃部隊のゴ布林1体に殴りかかった。そのまま、ドミノ倒しみたいに倒れていった。

「ちい…!!その程度のザコに…」

「オレは、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

遊夜 手札2 LP4000

モンスター E・HEROフォレストマン×1(攻)

魔法・罫 セットカード×2

「オレのターン、ドロー!ゴブリン・エリート部隊を召喚!バトル!!ゴブリン・エリート部隊で、そのザコを攻撃!」

「トラップ発動!ヒーローバリア!自分フィールド上にE・HEROがいるとき、相手モンスター1体の攻撃を無効にする!」

「ちい…!!ターンエンド!!」

取り巻きA 手札4 LP4000

モンスター ゴブリン・エリート部隊×1(攻)

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果発動!デッキ、墓地から融合を1枚、手札に加える。オレは、デッキから融合を手札に加える!!」

フォレストマンから緑色のオーラがデッキ目掛け放たれた…気にするつもりはないから、デッキから融合を手札に加える。

「マジックカード、融合!手札のアイスエッジと、フィールドのフォレストマンを融合!来い、E・HEROガイアを、融合召喚!!」

白くて、水晶のようなものがついているアイスエッジと、フォレストマンが発生した渦の中に入った。渦から現れたのはこげ茶色をした、大型のHERO。うん、勝てる。

「このカードだよ」

オレがそう言っつて、逃げるときにディスクにセットさせた元々の手札を見せた…1枚は、魔法・罫カードゾーンにはセットされないはずのモンスターカード、E・HEROレディオブファイア、もう1枚…これが最重要の、逆転用のカード。

「ミラクル…フュージョン？」

「これって確か、墓地か場を使っつて、融合のE・HEROを召喚する融合カードだろ？」

「そう。これによっつて、オレのエースを召喚しようと思ったのに…」
「…確かに、勝てるわね……」

どちらにしても…勝てたデュエルなのに…
！！！！！！

第02話 VS万文目の取り巻き（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想をドシドシ受け付けております。

第03話 翔覗き見未遂？事件（前書き）

遊夜VS日菜：多少ネタバレになりますが、まだ遊夜のエース出ません。

第03話 翔覗き見未遂？事件

(遊夜視点)

流明遊夜、ただいま15歳です。オレの誕生日は12月31日だから年越しのオマケみたいな感覚で祝われていた経験があります。え？どっかの発明家商人と同じ日？偶然だと思っ。

まあ、取り巻きとのデュエルがあつてから数日後：現在、湖に浮かぶボートの上です。十代と共に…。

「それにしても、翔君いつたい何したんだろ」

「とにかく、翔を助けるぞ！」

まあ…理由は大体分かるけど…。大体分かるけどね。ボートを進めると、別のボートが見えた…2隻ほど。

「来たわね」

「あゝ眠い…とつととコイツ引き渡して寝させて」

「…そういう訳にはいかないわ」

………なんだか一言で雰囲気粉碎されたような…まあいいか。2隻の船のうち、片方には天上院さんと黒夜さん、もう片方には確か、枕田シユンコと…浜口ややえ………何か違う…。

「とりあえず自己紹介したほうがいいと思うから、しておくよ！オレは流明遊夜！次、十代で」

「え！？まあいつか…オレは遊城十代！…まあ、明日香と日菜はもうこっちは知ってるからいいぜ」

「！あんた、レッドのクセに明日香様を呼び捨てにすんな！」

「十代：あんまり親しくない人は、さん付けのほうがいいと思うけど…」

「ん？いや、オレそういうのちょっと難しいんだよな…先生とか以外だと無意識に言っちゃうし」

十代、変なスキル身につけてるね…。年上の人にはさん付けしておこう。じゃないと嫌な印象もたれるから。

「まあ…名乗られたからにはこっちも名乗ったほうがいいわね…枕田ジュンコよ」

「それでは私も名乗っておきます。浜口ももえですわ」

そうそう！通りで違うと思った。殆ど忘れていたけどよく覚えていたオレ！

「アニキ…流明君…助けて〜！」

「あ、翔！」

「…十代、翔君の存在忘れてなかった？」

「……と、とにかく、翔を返せ！」

「…無視した！？」

「残念だけど、簡単に返す訳にはいかないわ」

まあ、大体分かるよ。翔のアカデミア生活の中でも、最大の濡れ衣であり汚点の1つでもあるから。

「こいつは女子寮のお風呂を覗いたのよ！…」

「だから覗いていないっす！！」

「まあまあ翔君、諦めて自主しなよ」

「流明君まで何言ってるっすか！？…ボクは覗いてないっす！！覗いてたら多分ここにいないっす！！」

「ほ、じゃあ覗いていたらどうなつてた？言葉しだいじゃ今すぐこの世とバイバイするかもしれないわよ…?」

あれ？なんだろ、般若的なものが見える、なんだかものすごく怖い般若的なものが見える。黑夜さんの背後にもものすごく怖い般若が見える。

「ひ、ひいいいいいいいい！！多分校長先生のところかクロノス先生のところに突き出されるっす〜！！！」

「ヘックシヨナノーネ！！」

……何者がくしゃみをしたような声が聞こえた方向を全員見た…その後、何も言わずに元の状態に戻した…うん、あれはきつと聞き間違いだ。

「返して欲しかったら、私とデュエルして勝った上で、日菜とデュエルをして、勝ったら返すわ」

「いやいや、あっちがもう1勝したらいいじゃん？もうとつと寝たいんだけど…2回デュエルはするけど」

「…仕方ないわね。2回デュエルして、1回でも勝ったらにするわ」「おう！」

…まず、十代と天上院さんのデュエルが行われた。まあ、最初は融合VS融合で、天上院さんが優位に立っていたけど…十代の逆転は、逆境あつてこそ。十代がサンダー・ジャイアントを召喚したことで、一気に状況が変わった。

「いつけーサンダー・ジャイアント！！ボルティック・サンダー！

！」

「きゃああああー！！」

「ぎいやあああああああ！！！！！！」

…どこかの誰かさんにもダイレクトアタック。生徒を落としきれようとした罰で正解かな。

「…まあ、これで一勝…といつても、2回デュエルだから、今度はオレと黒夜さんで問題ないかい？」

「とりあえず…気を抜いたら一気に負けるだろうから。最初から全力で来たほうがいいわ…こっちもこっちで、全力出すから」
「そうする」

そういい、オレと黒夜さんはディスクにデッキをセットした…会話中にどっちもシャッフルしたからね。ディスクが起動して、5枚を引いた。

「デュエル！！」

日菜 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「あたしのターン、ドロ―！手札にあるヘカテリスを墓地へ送り、神の居城 ヴアルハラを手札に！」

「！！！天使族！！！！」

ヤバイ…何故か先攻取られた上に、ヴァルハラを手札に加えられた…あれはマズイ！！

「そして永続魔法、神の居城 ヴアルハラを発動！神の居城 ヴアルハラは、自分フィールド上にモンスターが存在しないとき、1ターンに1度だけ、手札から天使族モンスターを1体、特殊召喚する。私は、手札からアテナを特殊召喚！」

ヴァルハラが発動されると、空から光が差した。すると、光の中から、槍のような武器と盾を持った美しい女性の天使が現れた…かなり厄介だ。

「さらに、ジェルエンディオを召喚。アテナの効果で、相手ライフに600ポイントのダメージを与える。シャイン・シュート！」
「！く…」

アテナの持つ武器から光が放たれて、その光がオレに直撃した。

遊夜 LP4000 3600

「さらに、アテナの効果でジェルエンディオを墓地へ送り、ジェルエンディオを、守備表示で特殊召喚！アテナの効果でダメージ！！」
「くう…」

遊夜 LP3600 3200

「ターンエンド」

日菜 手札3 LP4000

モンスター アテナ×1（攻）、ジェルエンディオ×1（守）

魔法・罫 永続魔法「神の居城 ヴァルハラ」

「オレのターン、ドロー！……手札1枚をコストに、ライティング・ポルティックスを発動」

「ちょ！？ま、マジ！！？」

「いつけー！」

このカード引けてよかった…このカードって本当に強力だね。上から雷撃が落ちて、相手フィールド上のモンスターを焼き尽くした。

「モンスターを1体セット、ターンエンド」

遊夜 手札3 LP3200

モンスター セットモンスター×1

魔法・罠 なし

「あたしのターン、ドロロー!!…よし!!」

「？」

「ヴァルハラの効果により、手札からThe splend VENU Sを特殊召喚！」

「な…まさか、プラネット・シリーズを!？」

光の中から…オレンジ色の、女性であろう天使が現れた…The splend VENU S…プラネット・シリーズと呼ばれるカードの1枚…能力がかなり厄介だ…!!

「バトル!The splend VENU Sで、セットモンスターを攻撃!ホーリーフェザー・シャワー!!」

The splend VENU Sの翼から、無数の羽が放たれ、オレのセットモンスター…露になったのは、白い髪をし、赤い鎧をつけたモンスター…ネクロ・ガードナー。

「The splend VENU Sの効果により、天使族以外のモンスターの攻撃力、守備力は500ポイントダウンする」

The splend VENU Sから放たれている金色のオーラ

…ネクロ・ガードナーがその光に当たった…ネクロ・ガードナーが苦しそうに呻いた…この時点のソリッドヴィジョンで呻けるんだ…。そして、無数の羽がネクロ・ガードナーに突き刺さった。

ネクロ・ガードナー ATK 600 100 DEF 1300
800

「ターンエンド」

日菜 手札3 LP4000

モンスター The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罫 神の居城 ヴァルハラ

「オレのターン、ドロー！くっそ…オレは、E・HEROフォレストマンを守備表示で召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

E・HEROフォレストマン ATK 1000 500 DEF
2000 1500

遊夜 手札2 LP3200

モンスター E・HEROフォレストマン x1 (守)

魔法・罫 セットカード x1

「あたしのターン、ドロー！！バトル！」

「ちよつと待ったー！！バトルフェイズ前に、トラップカード、威嚇する咆哮！相手はこのターン、攻撃宣言を行えない！」

どこからともなく獣の遠吠えが聞こえ、空間が震えた。The splendid VENUSが、少し後ろに引いた。

「ち…カードを1枚セット、ターンエンド!」

日菜 手札3 LP4000

モンスター The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罨 神の居城 ヴアルハラ x1、セットカード x1

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果で、デッキから融合を手札に加える!カードを2枚セット、ターンエンド!」

遊夜 手札1 LP3200

モンスター E・HEROフォレストマン x1 (守)

魔法・罨 セットカード x2

「あたしのターン、ドロー!バトル!」

「またバトルフェイズ前に威嚇する咆哮!」

「何積みしてんのよ…天空の使者ゼラディアスを墓地へ送り、天空の聖域を手札に加え、発動。ターンエンドよ」

天空の聖域が現れると…辺りが、滅びた文明の古代遺跡のようになり、黒夜さんの後ろには神殿らしきものが見える。まずいな…

日菜 手札3 LP4000

モンスター The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罨 神の居城 ヴアルハラ x1、セットカード x1、フィールド魔法「天空の聖域」

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果で、デッキから融合を手札に加える!そして手札からE・HEROエアーマンを召喚!エアーマンの効果は、このカード以外のHEROの数だけ魔法・罨カードを破壊するか、レベル4以下のHEROをデッキからサ-

ちする効果のうちどちらか：オレは、魔法・罨カードを破壊するほうを選択する。オレが破壊するのは、天空の聖域」

「！カウンタートラップ、神罰！！天空の聖域がある場合、効果モンスターの効果、魔法・罨カードの発動を無効にし、破壊する！」
「な…」

黑夜さんの後ろにある神殿から赤い雷が飛んできて、エアーマンを焼き尽くした：まさか、エアーマンがやられるなんて…。

「くっそ…手札からマジックカード、融合を発動！手札のフェザーマンと、フォレストマンを融合！現れる、E・HERO Great TORNADO！」

E・HERO Great TORNADO ATK 2800 2
300 DEF 2200 1700

「グレート・トルネードの効果で、相手フィールド上に存在する表側のモンスターの攻撃力、守備力を半分にする！タウン・バースト！！」
「！っ…」

The splendid VENUS ATK 2800 1400
DEF 2400 1200

「バトル！E・HERO Great TORNADOで、The splendid VENUSを攻撃！スーパードセル！！」

E・HERO Great TORNADOがその名の通り、巨大な竜巻になった…その竜巻が、The splendid VENUSに当たった…が、竜巻がかき消された。The splendid VE

NUSの背中には…見覚えのある、オネスト恐怖の翼が見えた。

「オネストの効果…分かるはずよ。光属性モンスターが戦闘を行うとき、手札から墓地へ送ることで、相手モンスターの攻撃力分、攻撃力がアップする…グレート・トルネードの今の攻撃力は2300、よって…」

The splend V E N U S A T K 1 4 0 0 3 7 0 0

「うそおおおお!!!」

「いつけー！オネスティ・ホーリーフェザー・シャワー!!」

オネストの羽付きで、無数の羽がグレート・トルネードに突き刺さった…ヤバイ、もう何も対策立てられない。

遊夜 L P 3 2 0 0 1 8 0 0

「あははは…ターンエンド…」

The splend V E N U S A T K 3 7 0 0 1 4 0 0

遊夜 手札0 L P 1 8 0 0

モンスター なし

魔法・罫 なし

「あたしのターン、ドロー。デユミナス・ヴァルキリアを召喚。さらにシャイン・スパークを発動。これにより、フィールド上の光属性モンスターは全て、攻撃力が500ポイントアップし、守備力が400ポイントダウンする」

「負けた…」

The splend V E N U S A T K 1 4 0 0 1 9 0 0
D E F 1 2 0 0 8 0 0

デユミナス・ヴァルキリア A T K 1 8 0 0 2 3 0 0 D E F
1 0 5 0 6 5 0

『日菜…このままトドメでいいな』

「OK。バトル！The splend V E N U Sで、攻撃！」

「悪あがきだけはさせてもらうよ…ネクロ・ガードナーの効果を使
い、ネクロ・ガードナーを除外して攻撃を無効」

いくらソリッドヴィジョンだからって無数の羽の攻撃を受けるのは
いやだ…半透明のネクロ・ガードナーがオレの前に現れて、The
splend V E N U Sの攻撃を全て受け止めた。

「じゃあ、これでトドメよ。デユミナス・ヴァルキリアで攻撃。ソ
ウル・スラッシュュ！！」

『これで終わりだ！』

デユミナス・ヴァルキリアが喋ったような気がする…オレが気にし
ているうちに、デユミナス・ヴァルキリアの手にある剣で切られて、
負けた。

「はあ…」

「まあ、元気出せよ、な！」

「元気出すっす」

「そう言われても…十代以外に負けたよ…ハハハハハ…」

デュエルが終わったから、オレと十代、そして翔の3人でボートを漕いでいる…それにしても黒夜さんって何者だよ…プラネット・シリーズ持っているなんて…。

「…どうだった？十代は」

「かなり強いわ…間違えばこっちが負けていた…そっちは？」

「同じぐらいよ…さすがにイレギュラー系統だけあるわね」

(日菜視点)

レッド組とのデュエルが終わって、あたしたちは女子寮へと戻る道を歩いている。…急いで戻らないとまずいわね…。

「そういえば、イレギュラー系統と、日菜さんが呼ぶ人は、どれぐらいいます？」

「そうね…大体2人よ」

さっつて…波乱の学園生活…どうなるのやら。

第03話 翔覗き見未遂？事件（後書き）

誤字、脱字、感想を待っております。

第04話 月一試験前編 十代達の奮闘(前書き)

今回、デュエル無しの回です。

完全におまけですが、遊夜の苦手な食べ物も分かります。

第04話 月一試験前編 十代達の奮闘

「ひいひい！訳分かんねえ〜！」

「訳分らないじゃなくて分かるつか。じゃないと実技に全てを賭ける自体に陥るよ」

「そりゃあ、さすがにいやだけどよお……」

「遊夜、ここはこう解いたらいいのか？」

「うん、大丈夫、正解だよ」

(翔視点)

ボクの名前は丸藤翔です。って、ボクは誰に話しかけてるんだろ……いや、この際神様でいいや！今ボクとアニキと隼人君は、ボク達の部屋で、流明君と一緒にテスト前の勉強中……それと今ボクは……即席で作った祭壇にお祈り中！

「神様〜！どうかお救いください〜！！」

「……翔君、祈ったらすぐ勉強したほうがさらに効率的だと思うけど」

う……的確に指摘された………まあ、それがいいよね……ボクも勉強しよう………それにしても……。

「なあ遊夜、ここの答えってなんだ？」

「ん？………十代、そこまでいけたのはいいと思うよ……ただ、さすがに4桁×4桁は自力で解こうか……面倒とか関係なく」

「う……まあ、解けたくないけどよお……」

「十代……それぐらい小学6年生でもできるんだな」

……アニキ………まあ、一般科目はもう事前に勉強は済んでるから、

デュエルに関することだ。今回は基礎だからっつと…。

「…流明君、このリクルーターって？」

「リクルーターか。リクルーターは、主に、戦闘破壊されることでデッキからモンスターを特殊召喚するモンスターのことだよ。代表例は、キラー・トマト、巨大ネズミ、シャイン・エンジェルかな…丸藤君、君のデッキはどんなデッキだい？」

「ボクのデッキ？機械族のロイドデッキだけど」

「ロイドか…じゃあユーフォーロイドかな。上級だから召喚しにくいけど、光属性だと思うから、シャイン・エンジェルの効果を使えば、確か召喚できるはずだよ」

す、すごい…ボクが驚いていると、隼人君も流明君に質問してきた。隼人君も驚いている…。

「すごいんだな。それじゃあ、この部分は？」

「？墓地肥やし…これは、エクゾディアに使われることがあるよ」

「エクゾディア…あの、特殊勝利のカードに？」

エクゾディアに使われるって、どういうことだろ…エクゾディアは手札に5種類の封印されしのカードが揃わなければ勝利できないのに…ボクの疑問に、流明君は気軽に答えた。

「うん。エクゾディアパーツを墓地へ送って、補助要員や闇の量産工場、ダークバーストを使って回収して、一気に手札を揃えるんだ」
「！そんな使い方が…」

「他にも墓地肥やしには、墓地にあつて力を発揮するカードを墓地へ送ったりする。まあ、あまりデッキを選ばないネクロ・ガードナーがいい代表かもね。後、やっぱりデッキ圧縮かな…やり過ぎたら負けに近づくけどね。それに、墓地にカードがあることで力を発揮

するカードを使ったり、墓地から切り札級のモンスターを蘇生させたり…後、特定のシリーズカードが数種類揃っていることで、特殊召喚できるキチ外モンスターがいるよ」

す、すごい…流明君、カードの知識豊富だ。アニキはデュエルがすごく強いけど知識は……まあ……うん、置いておいて…流明君は…アニキとのデュエルは今のところ勝った回数は少ないけど、それでも…カードの知識が豊富だ…なら…。

「流明君」

「?何??」

「一通り勉強が終わった後、ボクのデッキ、見てほしいっす!そして、どんなカードがボクのデッキに合うか、どんな戦術を使ったらいいか、教えてほしいっす!」

「いいけど」

よし!ボクは、心の中でガッツポーズをした…一通り終わった後、流明君はボクのデッキを見てくれた。そして、的確なカードを指摘したり、このデッキで使えるカードをくれたり、どんな戦い方をしたらいいかアドバイスも貰った。

流明君がアドバイスを一通り教えてくれた後、アニキも流明君にデッキを見てもらった…このときは指摘したり、アドバイスしたただけで、アニキにはカードをあげなかった…やっぱり、アニキに何回も負けていることに根を持つてるのかな?まあ、流明君に指摘されたカードは、アニキはある程度持っていたから、特に問題はなかった。隼人君も、しっかり教わった。コアラデッキということで、獣族関連のカードを遊夜君から貰った。もちろん、アドバイスも貰った。それで隼人君もアニキもやる気がメラメラ燃えてきたみたいだ…なら…。

「ちょ、遊夜速過ぎるだろ!!」

「ま、待ってくれよ!!」

「どうやったらそこまで速く走れるんだな!!」

「死ぬ気になれば人間なんでもできるんだよ!!!!とにかく遅刻してたまるかああああ!!!!!!!!!!」

な、なんでそこまで遅刻したくないんだろ…って、死ぬ気になれてそこまでできれば本当になんでもできそう…流明君が全力疾走越えの走りについていったから、ボクらは試験開始ギリギリで試験場所についた…ま、間に合ってよかったけど呼吸がうまくできない…。

(遊夜視点)

あゝマジ疲れた…なんでオレ目覚まし時計の時間セットし間違えたんだよ…オレのバカヤロー…!!!!!!!!…今は試験に集中しよ…そうじゃないと実技に全てを賭けることになる…。

「えーそれでは、ギリギリセーフの人達含めて、全員いますニヤ…?遅刻しても、それは本人達の自業自得なので、私は責任を取りませんのニヤ」

今回は大徳寺先生か。ギリギリセーフはオレ達だな。急いでいた人そこまですなかつたし…。大徳寺先生の開始の合図が言い放たれ、生徒は一斉にテストの回答に入った。

…一般科目、なんとか全て終了…結果はまあまあかな…。十代がヤケに絶望したようなオーラ猛烈な勢いで出してるけど…隣にいる翔が若干びっくりしてるし…って、まだテスト終わってないから、気を引き締めないと…次は、デュエルの筆記テストだ。

…酷い。いくら1年の初回だからといって少し酷い。手札の最大枚数があること自体酷い。まあ…フィールド魔法関連の問題があるのは気にしないでいいかな。習ったし…。さて…見直しも終わったから寝よ……なんだか通路を挟んだ隣の席からやけに絶望したというようなオーラ感じるような…。

「…ん〜！よく寝た〜！！…あれ？」

…なんでだろ、誰もいない…なんで？なんで誰もいないの？……そういえば、今日は新しいパックとかが入荷されるって話聞いたよ
うな……って！！

「寝過ごしたあああああああ！！！！！！！！！！」

完全にカードとかパックとかもう残ってないって！！！！相性いいカードとかあつたらもう後悔とかそういうことよりも酷いショックだよ！！…って、今の時間は……。

「…実技20分前か……はあ…」

新しいパック買ったかったな……とりあえず、飯食べにでも行くか…。

「…それじゃ、いただきますっ」と

ドローパン…デュエルアカデミア名物で、十代はドローパンで黄金

の卵を引き当てることの常連になっている…もう強烈なドロー運だよ…それにしても、案外空いていたな…何か忘れていたような気がするけど…まあいいかな。さて…2個買ったけど…どっちも当たり系統でありますように…。

「……………なんで…ウニパン……………」

よりによってウニ…魚の卵系統は苦手なのに…こうなったら食べざるしかないか…。

諦めつつウニパンを完食後、2個目のドローパンを食べた…こっちはチーズハンバーグパン…うん、完璧に大当たり!!

「それにしても…このパック、何が入ってるんだろな」

オレが購買に行ったら、トメさんがこのパックを、今朝のお礼でことしてくれたけど…こうなったら、開けてみるしかないかな。

「（……………融合採取…？なんだこれ……………ちょっと微妙かな…お、パラドックス・フュージョン。これ結構強力だからな…次元誘爆…これもちょっと微妙。…ブーストフュージョン？…まあ、サイドには入れておくとして……………？スパイラル・フュージョン……………！？な、なんじゃこりゃ…まあ、採用つと）」

…そろそろ試験時間かな…よし、試験会場に行かないと……………そういうえば試験会場どこだっけ…。

「遊夜のヤツ遅いな…」

「何かあったっすかね…」

「確かに…」

(十代視点)

遊夜遅いな…お前の番来たらどうすんだよ……。ん？翔が呼ばれたか…。

「んじゃ、翔、がんばってこいよ」

「で、でも…大丈夫すかね…」

「大丈夫だ。遊夜に見てもらって作ったデッキがあるだろ？」

「そうなんだな。きつと勝てるんだな」

翔ならきつと大丈夫だろ。油断しなけりゃ、きつと勝てるはずだぜ。

「…うん、がんばってみるっす！！」

そう言つて、翔は会場に向かつていった…なんかやけにカクカクした動きだけ…大丈夫か？…あ、ぶつかった……必死で謝ってるな……本当に大丈夫なのか、今更心配になつてきた…。

…あ、遊夜だ……って、いきなり翔にぶつかったな……また謝ってるし…？遊夜……アドバイスでもしてるのか…？お、翔が力強く歩き始めたな。…遊夜こっちに来たな。まあ、聞いてみるか。

「よ、遊夜。さっき翔にアドバイスでもしたのか？」

「十代に隼人君…まあ、そんなところだよ。2人の試験は？」

「オレも十代もまだなんだな」

「そっか」

「…そういや、なんで遅かつたんだ？」

オレが疑問に思つてたことを聞いたら、遊夜が苦笑した…どうした

んだ？

「それが…試験会場分からなくて…」

「そ、そうなのか」

しばらくして、オレが呼ばれた…翔も隼人も試験が終わった後で…遊夜がまだ呼ばれてないけどな。ちなみに、翔も隼人も勝ったぜ。さーて、相手は誰だろな！くうくう！！楽しみだぜ！！

第04話 月一試験前編 十代達の奮闘（後書き）

唐突ですが、オリカを募集したいと思います。

基本的に募集するオリカに制限をつけるつもりはありませんが、小説で登場するには、・の部分の条件をクリアするか、使わせてみたいと思ったカードに限定されます。

- ・強過ぎず、弱過ぎないカード
- ・登場するキャラクターのデッキに、ある程度入れることができるカード

なお、キャラクターのカードに関しては、気分に応じて使用するか決まりますので、ご了承してください。

遊戯王以外のカードゲームで存在するカードに関しては、問答無用で使用しませんので、ご注意ください。

後…できればですが、カードのイラストを記述してくださると助かりますので、できればカードのイラストを記述してください。

それでは、感想、誤字、間違いも含め、受け付けております。

第05話 月一試験後編 VS万丈目(前書き)

遊夜「えー、作者からちよつとした思い付きがあるみたいですよ。できれば本人に言ってもらいたいけど、何故か押し付けられたから言います。」

前書きで何か企画をやるそうです。何をやるかが決まっていますせんが…

ただ、作者が思いついたら企画が始まるそうです。

募集等をするつもりはないそうなので、あしからず…とのことですよ

遊夜に企画宣言を代わりにやってもらったところで、第5話、始まります。

第05話 月一試験後編 VS万丈目

「これでオレが攻撃力10000のモンスターを引いたら面白いよな？」

「バカな。そんな都合よく引けるものか！」

「でも、引いたら面白いよな？」

(遊夜視点)

そういえば、ここはアニメと同じかな。たしか、フェザーマン引いてトドメ…だったっけな。

「オレのターン、ドロー!!!…オレは、E・HEROフェザーマンを召喚!!!」

「!!!バカな!引き当てただと!!!???!」

まあ…これで終わりかな。それにしても…相変わらず敵に回したくないくらいのドロー運だ……本当に怖い。

「バトル!フェザーマンでダイレクトアタック!!!フェザープレイク!!!」

「ぐああああ!!!」

万丈目 LP10000

十代のデュエルが終わったか……そういえばオレ呼ばれてないけど…まさかだと思っけどまさかだよ…ね?

「エッソレデッハ20分後にシニョール万丈目準VSシニョール流

明遊夜のデュエルを行うノーネ。ナオ、人数が合わなかったため、シニョール万丈目にはもう1度デュエルをしてもらうノーネ」

やっぱり…まあ、20分は最終調整にでも使うかな…。さて…どんなデッキになるのかな。

「ソレデ〜ハ、シニョール万丈目VSシニョール流明のデュエルを開始するノーネ」

「さつきは油断したが、貴様は絶対に倒してくれる!」

「オレも負けるつもりはないからね」

そう言つてシャッフルし終わった後、ディスクにデッキをセットして、5枚引いた。

「デュエル!」

万丈目 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「オレの「オレのターン、ドロー!」取られた…」

無理やり先攻取られた…案外まずいかもしれない…。

「手札から魔法カード、手札抹殺を発動!互いのプレイヤーは、手札を全て捨て、捨てた枚数分、デッキからカードをドローする!」

げげ…いきなり抹殺か…融合回収にワイルドマン、スパークマンにヒーロー・シグナル、威嚇する咆哮が…お、融合とパラドックス・フュージョン来た。

「魔法カード、強欲な壺！デッキからカードを2枚ドロー！…一気に行くぞ！オレは手札から速攻魔法、フォトン・リードを発動！手札からレベル4以下の光属性モンスターを1体、特殊召喚する！オレは、V-タイガー・ジエットを特殊召喚！」

へ…フォトン・リードって、確かゼアルのほうで確か…カイトだったかな…それが使ってたカードの1枚じゃ…って、まあいいか。

「さらに永続魔法前線基地を発動！これによりオレは、1ターンに1度、手札からユニオンモンスターを特殊召喚できる！オレは、前線基地の効果を使い、Y-ドラゴン・ヘッドを、守備表示で特殊召喚！！そしてZ-メタル・キャタピラーを召喚！！！」

メタル・キャタピラーを召喚か…。ユニオンはすると思っけど…どうするんだろ。

「オレは、Zメタル・キャタピラーを、Y-ドラゴン・ヘッドに装備する！Zメタル・キャタピラーを装備したモンスターの攻撃力、守備力は600ポイントアップする！！！」

Y	ドラゴン・ヘッド	ATK	1500	2100	DEF	1
600	2200					

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

万丈目 手札0 LP4000

モンスター Y-ドラゴン・ヘッド×1(守)、V-タイガー・ジエット×1(攻)

魔法・罫 ユニオンカード「Z-メタル・キャタピラー」(Y-ドラゴン・ヘッドに装備)、セットカード×1

「オレのターン、ドロー！」

さて…手札最悪だ……融合あつてHEROいるのにモンスターこない…仕方ない。

「E・HEROボルティックを守備表示で召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

遊夜 手札4 LP4000

モンスター E・HEROボルティック×1(守)

魔法・罫 セットカード×1

「オレのターン、ドロー！Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃表示に変更し、バトル！Y・ドラゴン・ヘッドで、ボルティックを攻撃！」

「！く…」

「さらに。V・タイガー・ジェットでダイレクトアタック！」

「え！？うわー！！」

V・タイガー・ジェットが突撃してきた…スレスレで怖かったからかわしたけど…ソリッドヴィジョンでも怖い…。

遊夜 LP4000 2400

「ターンエンドだ」

万丈目 手札1 LP4000

モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(攻)、V・タイガー・ジ

エツト×1(攻)
魔法・罾 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セット
カード×1

「オレのターン、ドロー!……(ないよりマシ……いや、あつたほうが断然いい)オレはカードを1枚セット、ターンエンド」

遊夜 手札4 LP2400

モンスター なし

魔法・罾 セットカード×2

「オレのターン、ドロー!……カードを1枚セットし、オレは手札から、命削りの宝札を発動!オレは手札が5枚になるようドローする。そして5ターン後、手札を全て墓地へ送る」

「げげ!」

うそだろ……こつち絶賛事故ってる状態なのに相手はドローブースト!?!もしかしなくても絶賛大ピンチ!?!

「……カードを2枚セット。そしてバトル!Y・ドラゴン・ヘッドでダイレクトアタック!」

「トラップ発動!くず鉄のかかし!相手モンスター1体の攻撃を、無効にする!」

かかしが、Y・ドラゴン・ヘッドが撃ってきた光線を防いでくれた……それにしてもかなり丈夫だな、かかし。

「なら、V・タイガー・ジェットでダイレクトアタック!」

「おわ！何回やってもなれなさそう！！」

遊夜 LP2400 800

やばい…これはやばすぎる…ライフが800って…このままじゃ確
実にやばい…！！

「ターンエンドだ。さあ、もうサレンダーをしたらどうだ？」

万丈目 手札3 LP4000

モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(攻)、V・タイガー・ジ
エット×1(攻)

魔法・罫 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セット
カード×3

「残念ながら、そのつもりはない！オレのターン、ドロー！！」

！天使の施し…助かった！！このタイミングはまさに天使！！…強
欲来て欲しかったけど…。

「オレは手札から、天使の施しを発動！！デッキからカードを3枚
ドローし、2枚を墓地へ送る！！」

…ネクロ・ダークマン、オーシャン、ザ・ヒートか…。なら、ネク
ロ・ダークマンと…まあ、元々手札にあった戦士の生還かな。

「オレは手札から魔法カード、融合を発動！手札のオーシャンと、
ザ・ヒートを融合！来い！オレのエース、E・HEROアブソルー
トZero！！！！」

オーシャンとザ・ヒートが融合の渦の中に入って…現れたモンスターは、白い…鎧みたいな体をした、HERO…オレのエース、アブソルートZero。やっと召喚できた…!!

「バトル!!アブソルートZeroで、Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃!瞬間凍結!!!!」

「…だが、Y・ドラゴン・ヘッドに装備されているユニオンモンスター、Z・メタル・キャタピラーの効果で、Z・メタル・キャタピラーを身代わりにすることで、Y・ドラゴン・ヘッドは破壊されない!!」

Y・ドラゴン・ヘッドとZ・メタル・キャタピラーの合体が解除されて…あ、Z・メタル・キャタピラーが攻撃を受けて…凍って、破壊…ユニオンモンスターの身代わり効果って、こんな感じなんだ。

Y・ドラゴン・ヘッド	ATK	2100	1500	DEF	2
200	1600				

万丈目 LP4000 3700

「ターンエンド!!」

遊夜 手札2 LP800

モンスター E・HEROアブソルートZero x1 (攻)

魔法・罫 セットカード x2

「オレのターン、ドロ…!!ちいいい!!Y・ドラゴン・ヘッド、V・タイガー・ジェットを守備表示に変更!!ターンエンドだ!!」

万丈目 手札4 LP3700
モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(守)、V・タイガー・ジ
エット×1(守)
魔法・罨 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セット
カード×3

「オレのターン、ドロー！！バトル！！相手ターンのメインフェイ
ズ1に、トラップカード、挑発を発動！自分フィールド上に存在す
るモンスター1体を選択し、相手はそのモンスターしか攻撃できな
くなる。オレは、V・タイガー・ジエットを選択する」…なら、V
・タイガー・ジエットを攻撃！瞬間凍結！！」

Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃したかった…まあ、そこは仕方ないか
な。

「カードを1枚セット、ターンエンド」

遊夜 手札2 LP800
モンスター E・HEROアブソルートZero×1(攻)
魔法・罨 セットカード×3

「オレのターン、ドロー！！フ…フツハハハハ！！これでキサマは
終わりだ！！オレは手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地か
ら、Y・ドラゴン・ヘッドを特殊召喚！！さらに永続トラップ、正
当なる血統！！このカードが発動したとき、墓地の通常モンスター
を特殊召喚できる！オレは、X・ヘッド・キャノン特殊召喚！さ
らにトラップカード、ゲッド・ライド！墓地に存在するユニオンモ

ンスターを、自分フィールド上のモンスターに装備できる。オレは、Z・メタル・キャタピラーを、X ヘッド・キャノンに装備！」

X・ヘッド・キャノン	ATK	1800	2400	DEF	1
500	2100				

「さらに、Z・メタル・キャタピラーの効果により、X・ヘッド・キャノンの装備から外し、自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚するー！」

X・ヘッド・キャノン	ATK	2400	1800	DEF	2
100	1500				

おいおい…かなり回ってないか、これって…もうピンチになっているようにしか思えないような…。

「手札から思い出のブランコを発動！このカードは、墓地に存在する通常モンスター1体を特殊召喚できる。オレは墓地から、V・タイガー・ジェットを特殊召喚ー！」

？ブランコが現れた…ぶ、ブランコが一人で揺れ始めた…なんか怖い怪奇現象っぽい…って、なんか歪み始めた……ゆ、歪みからV・タイガー・ジェットが…なんてめんどくさい演出…。

「そして手札から、死者転生を発動！手札のカード1枚をコストに、墓地からモンスターを手札に加える。オレは手札を1枚墓地へ送り、W・ウイング・カタパルトを手札に加え、そのまま召喚！」

うわ出た…一気にくるかなこりゃ…。

「そして、V・タイガー・ジェットと、W・ウイング・カタパルトを除外し、VW・タイガー・カタパルトを特殊召喚！そして、Xヘッド・キャノン、Y・ドラゴン・ヘッド、Z・メタル・キャタピラーを除外し、XYZ・ドラゴン・キャノンを特殊召喚！！」

一気に来た…X、Y、Xは重なって、VとWは…まあ、合体かな。こっちの思惑通りになってくれればいいけど…。

「さらに、XYZ・ドラゴン・キャノンとVW・タイガー・カタパルトを除外！合体せよ、XYZ・ドラゴン・キャノン！！VW・タイガー・カタパルト！！」

…こういうのって変形合体っていうのかな…まあ、VWXYZは結構かっこいいからな…お、合体終わった。

「VWXYZ・ドラゴン・カタパルト・キャノンを、特殊召喚！」じゃあその特殊召喚にチェインしてカウンターラップ、パラドックス・フュージョン。オレの場にいる融合モンスターを除外して、相手の魔法・罠カードの発動か、モンスターの特殊召喚を無効にする。オレは、アブソルートZeroを除外」な、何！？」

歪みが、オレと万丈目のフィールドの境目ぐらいに現れて…歪みに、VWXYZとアブソルートZeroが飲み込まれた。なんか、切ないな…。

「くっそ！！ターンエンドだ！」

万丈目 手札0 LP3700

モンスター なし

魔法・罠 セットカード×1、永続罠「正当なる血統」×1

「オレのターン、ドロー!!!」

…強欲な壺…なんて最高のタイミング!!

「手札から強欲な壺を発動!! デッキからカードを2枚ドローする!!!」

…融合回収と、命削りの宝札…結構運がいいかな。

「カードを2枚セットし、命削りの宝札を発動! 効果説明は省略!」

…よし、いける!!!

「オレはセットされた魔法カード、融合回収と、O・オーバー・ソウルを発動! 墓地から融合と、融合素材に使われたモンスターを手札に加える…オレは、融合とオーシャンを回収! さらに、O・オーバー・ソウルは、墓地に存在する通常のE・HEROを特殊召喚できる!」

「バカな! お前の墓地に、通常モンスターなど…」

「最初の手札抹殺で墓地に送られていたのさ! E・HEROスパークマンを特殊召喚! さらに融合を発動! E・HEROバースト・レディとスパークマンを融合し、E・HEROノヴァマスターを召喚!!!」

オレの場に現れたのは…炎を纏った、甲冑のようなモンスター。まあ、別にこのモンスターじゃなくてもよかったんだけどね。

「バトル！ノヴァマスターで、ダイレクトアタック！！」

「ダイレクトアタックはさせん！トラップ発動！！異次元からの帰還！！ライフを半分支払い、除外されているモンスターを、可能な限り特殊召喚する！来い！XYZ-ドラゴン・キャノン、VW-タイガー・カタパルト！そして、X、Y、Zのモンスターよ！！」

万丈目 LP3700 1850

一気にモンスターが出てきた…XYZ-ドラゴン・キャノンだけ攻撃表示…やけに強気だな。でも、これでノヴァマスターの効果が見える！」

「オレは攻撃を続行し、VW-タイガー・カタパルトを攻撃！！フルブーストフレイム！！！」

ノヴァマスターの手から、膨大な炎が放出されて…VW-タイガー・カタパルトを焼き尽くした。

「さらに、ノヴァマスターがモンスターを戦闘によって破壊した場合、デッキからカードを1枚ドロウする！」

…まさかこのタイミングで引くとは…まあいいか。

「手札のカードを1枚コストに、速攻魔法、スパイラル・フュージョンを発動！このカードは自分のターンのバトルフェイズにしか発動できず、1ターンに1度しか発動できない融合カード。手札のモンスター1体以上と、自分フィールドのモンスター1体以上を必ず融合素材に使う必要性がある融合カード。素材条件にあった融合モンスターを、融合召喚する。オレはノヴァマスターとオーシャンを融合し、現れる！アブソルートZero！」

螺旋状の渦が上空に現れて…その中に、ノヴァマスターとオーシャンが入り、アブソルトZeroが、渦から舞い降りた。

「そして手札から速攻魔法、マスク・チェンジを発動！」

「ま、マスク・チェンジ？」

「マスク・チェンジは、自分フィールド上に存在するHERO1体を墓地へ送りに、融合デッキから、生け贄にしたHEROの属性と同じ、M・HEROを特殊召喚する」

「M・HERO?!」

「オレは、アブソルトZeroを墓地へ送り、変身！M・HEROヴェイパー!!」

アブソルトZeroが腰にベルトを巻いて…叩いた。そして、ベルトから光が放たれて…光が収まったら、そこには…仮面　　ダーみたいなモンスターが立っている。そして…万丈目のモンスターが凍りつき始めた。

「な、なんだ!?!」

「アブソルトZeroの効果…それは、アブソルトZeroがフィールドを離れたとき、相手フィールド上のモンスターを全て、破壊する。さつきは、モンスターがいなかったから使えなかったけどね」

「…ば、バカな！オレが…このオレが、負けるだど!?!」

万丈目のモンスターが完全に凍りつき…砕けた。残っているカードは…ない。

「バトル!!M・HEROヴェイパーで、ダイレクトアタック!!」

「う、うわああああ!!!!!!」

「フリアテイクエクスプロージョン!!」

ヴェイパーが飛び上がり…持っている武器で、万丈目を攻撃した。
そして…万丈目のライフが0になった。

万丈目 LP 18500

「ふう…危なかった…最高のデュエルだったよ、ありがとう」

「く…黙れ!!」

弾かれた…握手しようと思ったのに思いっきり弾かれた…案外痛いんだぞ!

第05話 月一試験後編 VS万丈目（後書き）

日菜「なんだかいきなり2話連続で出てないわね…いや、空気男よ
りマシね…今のところ出てないし…」と、愚痴言ってる場合じゃな
いわね…。

なんでも、作者が後書きにキーカードか使用オリカの紹介をするっ
ていう企画を立ち上げて、その紹介の担当は主に私、黑夜日菜よ。
それじゃ、さっそく紹介ね。

スパイラル・フュージョン 速攻魔法

手札を1枚墓地へ送り、発動できる。

このカードは、自分のターンのバトルフェイズのみに発動できる。
自分の融合デッキに存在する融合モンスター1体を選択する。選択
した融合モンスターの融合素材に合うように、自分の手札にあるモ
ンスター1体以上と、自分フィールド上に存在するモンスター1体
以上を選択し、墓地へ送る。選択したモンスター1体を、特殊召喚
する（この特殊召喚は、融合召喚として扱う）。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは、生け贄にするこ
とができない。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは、バトルフェイズ
終了時に、融合デッキに戻る。

「スパイラル・フュージョン」は、1ターンに1度しか発動できな
い。

日菜「遊夜の使ったオリカ、スパイラル・フュージョン。手札のモ
ンスター1体以上と自分フィールド上のモンスター1体以上を必ず
使う融合カード。」

速攻魔法だから、攻撃した後、追撃用に使うことはできるけど、このカードは自分のターンにしか発動できないから、防御に使うのは絶対無理ね。

後、バトルフェイズ終了時に融合デッキに戻るし、生け贄にも出来ないから、そこまできいとは思えないわね…まあ、デストラクト・ポーションや、今回遊夜が使ったマスク・チェンジを使うのがいいわね。

1ターンに1度しか使えないから、連続発動は不可能だから、要注意よ」

今回、前書きに何か企画を、後書きにキーカード紹介かオリカ紹介の企画を立ち上げました。あまりにもさみしかったもので、立ち上げました。

それでは、感想、誤字、脱字、指摘等を受け付けております。

第06話 VSタイタン（前書き）

遊夜「…この企画何をするかまだ作者決めていないようです…それと、この回は作者曰く、グダグダだそうです」

この回、私にとってはグダグダですが、どうぞ読んでください。

第06話 VSタイタン

(作者視点)

ある日の夜、レッド寮にて、十代、翔、隼人、遊夜の4人が集まっている。明かりは、蝋燭だけであった。

「そして、少年は目を覚ました…目を覚ました少年は、いつも通りの部屋を見て、安心し、ベッドから降りて、部屋を出た…だが、少年は知らなかった…少年の眠っていた位置のふとんが…血のような赤い色で、真っ赤に染まっていたことを!!!」

「ひ、ヒイヒイヒイ!!!」

「…っていうのが、今の話…どうかかな？レベル12だとは思っけど」「れ、レベル12どころか、も、もももうレベルの枠超えてるっす

…」

「そ、そうなんだな。お、思わず少し漏らしたんだな…」

「まあ、確かに結構怖かったな。そんじゃ、次はオレだな。ドロ―

！…ちえ、レベル1かよ…」

十代はレベル1のモンスターを引いたようで、話を始めた。なんでも幼い頃、夜に声を聞いたようで、その声は、いつしか聞こえなくなったというものであった…十代は当時、精霊の声だと思ったようである。

「へー、不思議な話っすね」

「確かに…(まあ、その声って多分あれかな…)」

「おやおや？みなさん、一体何をしていますかニヤ〜?」

「あ、大徳寺先生…」

「げーだ、大徳寺先生…じ、実は、その…引いたカードのレベルに

応じた怖い話をするっていうことをやって…」

「あの、その、えーっとですね…その、これはですね…まあとにかく…見逃してくださいお願いします」

「か、勘弁してもらいたいんだな」

翔が気付き、十代が、目線が泳いでいる中、説明、遊夜が土下座、隼人は頭を下げた。すると、大徳寺はいつも通りではあるが、口を開いた。

「別に気にするつもりはないのですニヤ〜。まあ、面白そうですから、私も飛び入り参加させてもらいますニヤ」

そういうと、大徳寺はシャッフル終了後のカードの束からカードを一枚抜いた…カードのレベルは、12であった。

「レベル12にですニヤ」

「ひいひい!!」

「よりよってレベル12なんだなー!」

「?どうしてそこまで怖がるのニヤ?」

「れ、レベル12は、アニキが怖い話をする前に、流明君が話して、怖すぎてレベル12オーバーだったっす…」

「そうなんだな!もう怖すぎてちょっと漏らしたかもしれないんだな」

「なるほど…まあ、私の話は多分、レベル12ですから、安心してくださいニヤ」

それを聞いた翔と隼人は安心したように吐息を漏らした…一応言うが、レベル12は最上級…つまり、一番怖い話が出るであろうレベルなのである。

そして、大徳寺は話を始めた…なんでも、アカデミアにある廃寮に

纏わる話である。なんでも、そこでは闇のデュエルに関する研究がされていたが、あるときから生徒が行方不明になるといふ事件が発生し、ある日とうとう、その寮は廃寮になった…という話である。

それから数十分後、十代達は大徳寺の話に出てきた廃寮に来ていた。理由は、十代が廃寮に探検に行こうぜ！と言い出し、ほぼ無理やり感覚で連れて行ったからである。

「あ、アニキ〜帰ろうよ〜！」

「そ、そうなんだな…き、きつと何か出るんだな…」

「確かに…オバケとか増殖するGが出てきそうだ」

「まあともかく…くう〜！楽しみだぜ！！」

「楽しんでるの君だけだつて…」

遊夜が呆れたように呟いた…そう言った遊夜だが、十代が探検に行こうぜ！と言ったときに、一切反論はしなかった…。廃寮を探検している際、写真立てに写真があったため、回収した。その後、廃寮を探検していた十代達であるが、突如、女性の悲鳴が聞こえた。

「ひい?! な、なんつすか!?!」

「女性の悲鳴…みたいだね」

「い、いつたいなんだな!!?!」

「!こつちにカードが…」

十代がカードを見つけたとのことで、他の3人が近くに行ってみた。そのカードは…エトワール・サイバーであった。

「エトワール・サイバー…おそらく、天上院さんのカードである可能性が高いね」

「！さらにカードが…」

その後、十代が見つけたのは、ドゥープル・パッセ、サイバー・ブレイダーであった。そして…見つけていくうちに、細い通路に入り、通路の終わりが開けているようである。それを見た遊夜は、十代達を止まらせた。

「…3人とも、ここから先には何があるか分からない…注意して進んだほうがいいと思う」

「とにかく、先に行こうぜ…慎重にはなるけどな」

十代の発言を聞き、翔が若干青ざめた表情でいる。怖いものが苦手なのである…。

「い、行くつすか？」

「まあ、気になるからな」

「ほ、本当に行くのか?!」

「なんども言うなよ…気になるって言ってるだろ」

「…とにかく、慎重に行こうね」

そういい、4人は先へ進んだ…。

(遊夜視点)

廃寮ってことは若　ヴォイスのタイタンか…。さて、オレがいることでどう変わるか…うん、デュエルすることになったらもう速攻で攻めるか…サイドデッキに入れたカードを使えば、きっとできるはずだ、そう、きっとできるはず…そう思いつつ、オレは先へと進んだ…通路の先は広間のようになっていて、そこには、黒衣に身を包

んだ巨漢が立っている。

「よおく来たなあ、遊城十代、流明遊夜あ……………それで、誰が遊城十代だあ…流明遊夜は女顔だと言うことで、君であってはいるだろうからなあ」

「女顔で悪かったな…」

畜生…なんで女顔なんだよ…転生前でもここまで女顔じゃなかったよオレ！畜生、やっぱり髪なのか！やっぱり髪が長いのがいけないのか畜生！！

「オレが遊城十代だ！」

「そうかあ…ならば遊城十代か流明遊夜あ、どちらかが、私とデュエルをしてもらう…それもあ、ただのデュエルとは違う…闇のデュエルでああ」

「…なら、オレがやる」

「…りゅ、流明君危険っすよ！！闇のデュエルがなんなのか、流明君も知ってるはずっす！」

「関係ない。それに…本物の闇のデュエルなんて、もう出来ないだろうから」

「何い?!」

第4期でダークネスの事件…あれは真正銘の闇のデュエルと言ってもいい…ダークネス自体、闇の力だから。

「それが本物が偽物かは分からない…だが、速攻で決めさせてもらうだけだ！」

そういつてオレは、デッキをシャッフルし、事前に腕にはめてあったディスクにセットした…タイタンもしっかりとシャッフルしてか

らセットした。

「それではあ…デュエル、開始といこうか…それと、私の名はタイタンだあ…」

「ご丁寧にどうも…それじゃ」

「デュエル！」

遊夜 手札5 LP4000 タイタン 手札5 LP4000

「君にい、先攻を譲ろうう…」

「それじゃ遠慮なく…オレのターン、ドロー！」

…手札は…お、ラッキー。いきなり融合がある。

「手札から魔法カード、融合！手札のボルティックと、レディオブファイアを融合し、E・HEROノヴァマスターを召喚！」

炎を纏ったHERO、ノヴァマスター…先攻でZero召喚したいというのは欲張りなのだろうか…まあいいや。

「さらに、フォレストマンを守備表示で召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド」

遊夜 手札1 LP4000

モンスター E・HEROノヴァマスター×1（攻）、E・HER

Oフォレストマン×1（守）

魔法・罫 セットカード×1

フォレストマン高確率で来るよな…若干過労死モンスターになっ

そこまで驚かなくてもいいとは思っけど…そう思いながら、5枚になるよう、デッキからドロウした…お、ラッキー。

「手札からR・ライト・ジャスティス発動。このカードは、自分フィールド上に存在するE・HEROの数だけ、フィールド上の魔法・罫カードを破壊する…フィールドには2体のE・HERO…よって、タイタン…アンタのセットカード、2枚とも破壊させてもらう」
「ぬう！しまった…」

伏せられていたのは…ヘイト・バスターに奈落の落とし穴…危ない危ない…危うく融合召喚したモンスターを消されるところだった。それじゃさっそく…。

「永續魔法、フュージョン・ギフト！自分が融合召喚に成功したとき、自分はデッキからカードを2枚ドロウする。ただし、この効果は1ターンに1度しか使えず、フュージョン・ギフトは、自分フィールド上に1枚しか存在できない」

「またもドロウカード!？」

「そして手札から融合を発動。手札のフェザーマンとアイスエッジを融合し、E・HEROアブソルートZeroを融合召喚」

よっしゃー！アブソルートZero召喚できた…そういえばあのセットモンスターなんだろ…怪しいけど今除去できる手段と言ったらもうZeroぐらいだろうから…まあ、とにかく…。

「フュージョン・ギフトの効果で、デッキから2枚ドロウ！」

…ワーオ、なんかすごいことになったこりゃ…。

「手札からミラクル・フュージョンを発動。このカードは自分フイ

ールド上か墓地を使って、E・HEROを融合召喚できる融合カード。その効果で、墓地のE・HEROボルティックとレディオブフアイアを除外し、E・HERO Theシャイニングを召喚！」

オレのフィールドに、歪みが発生し、その中から、白い…本当に説明ににくいな……。白い…もう白いHEROでいいや…。とにかく…これで決まったかな…バトル・フェーダーとかない限り。

「Theシャイニングの攻撃力は、除外されているE・HEROの数だけ、300ポイントアップする…除外されているE・HEROは2体、よって攻撃力は…」

E・HERO Theシャイニング ATK 2600 3200

「攻撃力3200だとお!？」

「バトル!ノヴァマスターで、セットモンスターを攻撃!フルブーストフレイム!!」

ノヴァマスターが出した炎が、セットされたモンスターを焼き尽くす…セットされたのは…デーモン・ソルジャー…他にもいるだけ、それか…。

「それじゃ、ノヴァマスターの効果発動。ノヴァマスターがモンスターを戦闘によって破壊した場合、デッキからカードを1枚ドロ―できる」

「お前え…いったい何回ドロオ、するつもりだあ…」

「これで最後だろうけど…ドロ―」

…エフェクト・ヴェーラー…奇妙なタイミングで引いたな…まあいいや。

「それじゃ、Theシャイニングでダイレクトアタック！オプティカル・ストーム！」

「ぬう…ブルアアアアアアアアア！！！！」

無数の光がTheシャイニングが放たれ、タイタンに直撃した…結構痛そう…。

タイタン LP4000 800

「ぐう…これを見るがいい…」

「おっと、その手には乗らない…」

オレは光が放たれる前にすぐ目を覆った…本当なら結構危ないけどね……光が収まった場合に、目の覆いを動かす…うん、タイミングばっちり。

「うわああ！！！」

「た、タイタンの体が消えてる！？！」

「どうなってるんだな！？！」

…そりゃいきなり人の体消えてたら誰でも驚くよな…でも…。

「それじゃ、アブソルートZeroでトドメ。瞬間凍結！！！」

何一つ変わらないという事実が見えるオレに、情けなど無い！Zeroが接近し、タイタンを氷づけにした。

タイタン LP8000

デュエルが終了し、ソリッドヴィジョンも停止した。氷づけはただの演出だから、もちろん消えた。でも…何故か厄介なことが…。

「ぬあああ！！な、なんだこれは！！？」

…アニメにも出てきた闇…それが何故か吹き出し、タイタンを飲み込もうとしている…って、こっちにも来た…！！！！

「なんでこっちまで…！！？」

「！まずいんだな！！囲まれた！！！」

「え、うそ！？」

前田君の発言に、丸藤君は驚いた…って！マジで囲まれてる…このままだと確実にマズイのは目に完全に見えてる…どうすればいいんだ…。

「た、助けってくれええええ！！！」

タイタン…すまん、こっちも余裕ない…ってなんか津波みたいに来たー！！！？

「も、もうおしまいっす！！！」

「諦めんな！きつと、何か方法があるはずだ！！！」

「方法って言ったって、何かあるんだな！！？」

「えっと…！そうだ！！十代、確か…ハネクリボーの精霊いるよね！！！」

「相棒のことか！！！」

『クリクリ〜！！』

あ、早速出てきた……薄い光の膜が出来て…あ、闇が膜を避けてい

く…ハネクリボーすごい…って…。

「これっていつまで持つかな…」

「さ、さあ…相棒の言葉、全然分かんねえから…」

「ど、どこに何がいるっすか?!」

「な、なんかよく分からないが、助かってるみたいなんだな…」

とにかく…今見えてないだけだが…天上院さんも危ないかもしれな
い…くっそ…!!

「どうすればいいんだ…何か策は…」

『…ター』

「(?なんだ、今の声…幻聴…)」

『マ…』

「(いや、何か違う…)」

『マ…ター』

「(この声…いったいどこから…)」

『私…こ……す』

私、こ、す?…何が言いたいんだろ…オレがそう思っていたら、不
意に光が見えた…それは、デュエルが終了したら闇が吹き出したか
ら、手札をデッキに置くので精一杯だった、さっきのフィールドと
まったく同じ状況であるデュエルディスク…そのディスクにセット
されているデッキから…いや、デッキの中にあるカードから、光が
放たれていた。

「なんだ…?」

上のほうだから、デッキから1枚1枚引いた…光っていたカードは、
案外早くに見つかった。そのカードは、デュエルの最後にドロ―し

た、エフェクト・ヴェーラーだった。

「（エフェクト・ヴェーラーのカード…？でも、なんでこんなに光を……？）」

どうしてこんなに光を放っているのか…そのことを考えていたら、不意にエフェクト・ヴェーラーのカードが自分から浮かび、さらにカードから放たれる光が、さらに強くなった。光があまりに強すぎて、オレは目を覆った…多分、十代達も覆っただろう。

「な、なんだ?!」

「すごく眩しいっす〜!?!」

「眩しいんだな…!」

「く…」

オレが目を覆う寸前…何か、人のようなものが見えたような気がした…でも、光が強すぎて、本当かどうか、まったく確認できなかった…強かった光が徐々に収まっていくのが、なんとなく分かった。少し目を覆っていた腕を動かしてみた…エフェクト・ヴェーラーのカードが浮かんでいて、光こそ今だ放たれていたけど、さっきに比べたら全然眩しくなかった。

「…」

「?遊夜、どうした…?さっきの黒いヤツが…消えてる?」

「え?...本当っす…」

「…確かに、そうなんだな…」

オレは浮いていたエフェクト・ヴェーラーのカードを手に取った…一瞬、カードのイラストにあるエフェクト・ヴェーラーがウィンクしたように見えた気がしたけど…気のせいかな。オレは、カードを

デッキに戻した。そして、辺りを見回してみた…そこには、倒れているタイタンと、やっぱりまだ倒れている天上院さんが見えた。

「とにかく、早めにここを出よう…気味悪いところだし…さっきのヤツが来ないとも限らない」

「そうだな…タイタンはどうする?」

「天上院さんを誰が運ぶかの問題を考えたほうがいいとは思うけど…」

「それなら問題ないわ…あたしが運ぶし…それと、タイタンを運ぶの…ちよつと待て」

…なんだろ、後ろ向いたらさっきよりもやばい状況見ることになるかも…って、十代達も必死で見ないようにしている…あ、丸藤君が気になってチラツとみた……そんなに青ざめてどうしたんだろ…気になるな…!!!

「(さ、三幻神が光臨なされているー!?)」

く、黑夜さんの背後に三幻神3体とも光臨してるんだけど!明らかに何が起きてるの!?超常現象!?!?

「な、なあ…な、なんでタイタン運ぶの待つ必要があるんだ…?」

「…タイタンぶん殴ったりしてから運べ」

「命令!?ちよ、それまず…い」

…十代、君もみたんだね…あ、前田君も見てる……とりあえず、威圧感凶悪すぎるんだけど、何この超力オスな状況、もう怖すぎる…。

その後、タイタンがボコボコにされた後、オレ達が運んだ…多分、

無視して運んでたらとんでもないことになってた気がする…。

「…なんだか体中が痛むのだが…なあにがあったあ…？」

「えっと、気にしないほうが特です」

「そうかあ…。だが、何故、私を運び出したあ」

「別に、理由は特に無いですよ…あそこは気味悪かったから、放置しておきたくなかった、それだけです…それに、あなたは闇のデュエリストではない」

オレが、タイタンが闇のデュエリストではないといい、十代達が驚いている…黑夜さんは表情の変化はなし…どうしてだろうか…。

「なあ、遊夜…それって、どういうことだ？」

「イカサマってことかな…ほら、この偽千年パズルから光が放たれただろ？」

「…そういえばそうっすね」

「確かに…でも、どういうことだ？」

「それは私から説明をしよう…簡単に言えば、催眠術だあ」

催眠術…十代がそうなのかと言った…やっぱりさすがに知っているか…オレがそう思ったとたん…。

「でも、催眠術って、眠らせるんじゃないのか？」

思わずその場にいた全員（天上院さんはまだ気絶している）がずっこけた…。

「アニキ…ポ　　ンの催眠術とは違っつすよ」

「え？どういうことだ？」

なんだろう、ものすごく頭痛くなってきた…その後、タイタンは本土へと戻っていった…罪を償うかはともかく、闇のデュエリストを名乗るのをやめるようだ…もうあんな体験2度としたくないらしい。

第06話 VSタイタン（後書き）

さっそく葦切さんが投稿したオリカ、フュージョン・ギフトを効果変更で使わせてもらいました。

効果変更の理由に関しては、融合を1ターンに連続でできるようなデッキに入れたら、効果の変更がなかったら後何回融合するんだ…という自体になると予想したからです。

日菜「…タイタン戦終了…今回は制裁デュエルまで飛ばされるみたいよ。それじゃあ、今回のキーカード…一応、エレメンタル・ヒーロー E・HERO The ザ シャイニングみたいよ。

エレメンタル・ヒーロー

E・HERO The シャイニング

戦士族・効果/融合 星8 光属性 ATK 2600 DEF 2100

「E・HERO」と名のついたモンスター+光属性モンスター

このカードは融合召喚でしか召喚できない。

このカードの攻撃力は、除外されている自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、ゲームから除外されている自分の「E・HERO」と名のついたモンスターを2体まで選択し、手札に加える。

日菜「E・HEROと光属性を融合素材とする融合のE・HEROよ。除外されている自分のE・HEROの数だけ攻撃力は300ポイントアップする効果を持っているから、除外して融合するミラクル・フュージョンとは相性はいいけど、除外されているカードをデッキに戻して融合する平行世界融合とは相性は微妙よ。

パラレルワールド・フュージョン

後、フィールド上から墓地に送られたら除外されている自分のE・

HEROを、2体まで手札に戻せる効果も持っている…まあ、墓地に送られなかったら意味は無いけど。後、融合を使っても、効果処理のタイミングを逃すから使えないから、勘違いしないように。

第07話 制裁デュエル 遊夜VS女帝の支配者（前書き）

三沢「な、なんだここは…っ…お前は作者！…！何故オレが出ない！！」

アトラン「あ、三沢…ごめん、出すタイミング見つからない」

三沢「な、何…オレは解説役があるじゃないか！」

アトラン「…入れること忘れた」

三沢「…作者の悪意を感じる…」

…無意識な悪意かそれともただ単に出すのを忘れているかはともかく、三沢は1期空気になる確立が非常に高い状況下です。

それでは、結局三沢は名前すら出ていない第07話、どうぞ！…三沢の救済手立てを考えておきます。

「ソレデ〜八続いて、シニョール流明遊夜のデュエルを10分後に開始するノーネ」

…10分後か…少し時間が出来たな…。

「(さてと…スパイラル・フュージョンは使わない、融合採取は…入れてみようつと…ブースト・フュージョンは中々面白い使い方が出来そうだから採用つと)」

…：…：…：案外時間かかりそうだな…パラドックス・フュージョンがもう1枚程度欲しいけど、仕方ない…パラドックス・フュージョンは、結構レアなカードだから入手が困難…もう1枚あったら結構変わっているかな…：…：あ。

「もうすぐ10分か…」

…：これぐらいでいいかな。もつと調節したかったけど…。とにかく、出来る限りの全力でいかないと…退学になんてなつてたまるか。

「ソレデ〜ハ、シニョール遊夜の制裁デュエルを始めるノーネ。今回の対戦相手〜も、武藤遊戯と戦ったデュエリストナノ〜ネ。それも、実力は先ほどの迷宮兄弟よりも上ナノーネ！」

へ…：迷宮兄弟よりも実力が上…？まさか、社長…：いや、来る訳ないか。じゃあ、ペガサス会長…も、来ないな…あの人は忙しいという正当理由だろつし…：じゃあ、城ノ内克也さん？それとも孔雀舞さん？

オレが悩んでいると…：反対側から、女性が歩いてきた…歩いてきた

オレと姉さんはデッキをよくシャッフルした後、ディスクにデッキをセットして、上から5枚を引き、手札にした。

「デュエル!!」

遊夜 手札5 LP4000 愛 LP4000

「先攻は遊夜に譲るわ」

「それじゃ遠慮なく、オレのターン、ドロ―!」

…いきなりいい手札かな。とにかく、このカードが来てくれたのは、ありがたい。

「手札から沼地の魔神王を墓地へ送り、融合を手札に加える。さらに、E・HEROレディオブファイアを守備標示で召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド。そして、レディオブファイアの効果。自分のターンのエンドフェイズに、自分フィールド上に存在するE・HEROの数だけ、相手ライフに200ポイントのダメージを与える。オレの場にはレディオブファイア1体。よって、200ポイントのダメージを与える。ファイア・バレット!」

レディオブファイアが指を立てると、その指先に火の玉が現れて、それを姉さん目掛け、投げた。

「…」

愛 LP4000 3800

遊夜 手札4 LP4000

モンスター E・HEROレディオブファイア×1(守)

魔法・罾 セットカード×1

「私のターン、ドロ。…手札から魔法カード、苦渋の選択を発動。デッキからカードを5枚選択し、相手に見せ、1枚を選ばせ、選ばれた1枚を手札に加え、選ばれなかったカードを全て墓地へ送る…私が選ぶのはこの5枚よ」

姉さんが選んだのは…レベル・ステイラー3体と黄泉ガエル2体か…ここは…。

「レベル・ステイラー1体を選択」

「ええ、じゃあ残りを墓地へ。そして、モンスターを1体セット、カードを1枚伏せ、ターンエンド」

愛 手札3 LP3800

モンスター セットモンスター×1

魔法・罾 セットカード×1

「オレのターン、ドロ！」

…このタイミングなら…このカードでいいかな…。

「手札から魔法カード、融合を発動！手札のスパークマンと、レディオブファイアを融合し、E・HEROノヴァマスターを融合召喚！」

この素材なら、The^ザシャイニングも召喚できるが…生憎、除外する効果を持つカードが手札に来ていない…。今はノヴァマスターで攻めるのが堅実的はずだ…。

「バトル！ノヴァマスターで、セットモンスターを攻撃！フルブーストフレイム！」

ノヴァマスターの両手から炎が噴出した。姉さんのセットモンスターは…レベル・ステイラー…よし、いける…ノヴァマスターがレベル・ステイラーを焼き尽くし、破壊した。

「ノヴァマスターの効果で、デッキからカードを1枚ドローする…ターンエンド」

遊夜 手札4 LP4000

モンスター E・HEROノヴァマスター×1（攻）

魔法・罫 セットカード×1

「それではエンドフェイズに罫カード、強欲な瓶を発動。デッキから、カードを1枚ドロー。そして私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、私の場に魔法・罫カードが存在しないことにより、黄泉ガエル1体を墓地から蘇生」

く…やっぱりフリーチェインカード…墓地にはレベル・ステイラーがいる…一気に攻めてくる…！

「私は黄泉ガエルを生け贄に、雷帝ザボルグを召喚！ザボルグの効果発動！ザボルグが生け贄召喚に成功したとき、フィールド上のモンスター1体を破壊する…私が破壊するのは、ノヴァマスターを破壊！」

「！く…」

黄緑色のアフロ…でいいのかわからないけど、銀色の鎧をつけた男が、ノヴァマスター目掛け、雷撃を放ち、ノヴァマスターを焼き

尽くした…まずい…。

「バトル！ザボルグでダイレクトアタック！ボルティック・ライト
ニング！」

「！ぐああ…」

遊夜 LP 4000 1600

「レベル5のザボルグのレベルを1つ下げ、墓地からレベル・ステ
イラーを守備表示で特殊召喚。ターンエンド」

愛 手札4 LP3800

モンスター 雷帝ザボルグ×1（攻）、レベル・ステイラー×1

（守）

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロー！」

く…このカードじゃない…！間違えば、次のターン、オレの負けに
…仕方ない。こういう運任せは好きじゃないけど…。

「手札から魔法カード、運命の天秤を発動！ライフが2000ポイ
ント以下の場合、発動できる。コインの表か裏を宣言し、当たった
場合は自分が、外れた場合は相手がデッキからカードを2枚ドロー
する。…オレが宣言するのは、表！」

持参したデュエル用のコインを指に乗せる…これが失敗すれば、オ
レの負けは決定的…。頼む…！

「（当たれ…！）」

………よし！

「コイントスの結果は、表！よって、オレが2枚ドロロー！」

…なんとか、1ターン持つことができるかもしれない…。どちらにせよ、かなりギリギリ…例え次のターンを凌いだとして、次のオレのターンで、逆転できるカードを引かない限り、オレに勝ち目は無い…。

「モンスターを1体セット、カードを2枚セット、ターンエンド」

遊夜 手札4 LP 1100

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 セットカード×2

「私のターン、ドロロー。黄泉ガエル自身の効果で黄泉ガエルを1体蘇生、カードを1枚セット、そしてレベル・ステイラーを生け贄に、光帝クライスを召喚！」

クライス…！狙いは除去とドロローか…！

「クライスの効果発動。クライスが召喚に成功したとき、フィールド上のカードを2枚まで選び、破壊する。その後、カードを破壊されたプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロローできる…私は、黄泉ガエルと、私のセットカードを破壊。破壊された2枚は私のカード。よって、2枚ドロロー」

黄色い、光輝く鎧のようなもので身を包んでいる帝、光帝が掌から光を放つと、その光に黄泉ガエルと姉さんのセットされたカードが

破壊された…セットされていたカードはゴブリンのやりくり上手…フリーチェインカードを破壊した…。

「…手札から魔法カード、デュアル・サモン二重召喚を発動。これにより、私はこのターン、2回まで通常召喚を行える…既に1回行っているから、残り1回の通常召喚が可能よ。私はクライスのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚。そして、レベル・ステイラーを生け贄に、氷帝メビウスを召喚。メビウスが生け贄召喚に成功したことで、フィールド上の魔法・罨カードを2枚まで選び、破壊する。破壊するのはもちろん、遊夜のセットされた2枚のカードよ」
「その効果にチェインし、罨カード、威嚇する咆哮！このターン、相手は攻撃宣言を行えない！！」

若干水色がかつたような銀色の鎧を身につけ、マントをつけた帝の手から吹雪が放たれたが、どこからともなく獣の遠吠えが聞こえ、空間が震えた…もう1枚のカードはヒーロー・シグナル…こっちもこっちで賭けの1枚だったけど…。

「…クライスとメビウスのレベルをそれぞれ1つ下げ、レベル・ステイラー2体を、守備表示で特殊召喚。カードを1枚セット、ターンエンド」

愛 手札2 LP3800

モンスター 雷帝メビウス×1（攻）、光帝クライス×1（攻）、
氷帝メビウス×1（攻）、レベル・ステイラー×2（守）
魔法・罨 セットカード×1

…おそらく、あのセットカードは何かしらのフリーチェインカード…和睦の使者や月の書、エネミー・コントローラーだったら負ける…。とにかく、このドローに、全てがかかっている…。

「（頼むぞ、オレのデッキ…！）オレのターン……ドロー…！」

…このカードで切り抜けられるか分からない…でも、賭けるしかない！

「手札から魔法カード、融合採取を発動！手札を2枚墓地へ送り、デッキから、融合、もしくはフュージョンと名のついた通常魔法を1枚、手札に加える。手札のE・HEROオーシャンとE・HEROプリズマーを墓地へ送り、デッキから…ミラクル・フュージョンを手札に…！」

「ミラクル・フュージョン…あのカードね…」

姉さんに、多分読まれている…だとしても…。

「オレは、止まる訳にはいかない！！手札から魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！墓地のスパークマンと沼地の魔神王を除外し、E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマンを召喚…！」

スパークマンと沼地の魔神王が歪みに入り、歪みから、強烈な光が放たれた。そして、光が弱くなり、その姿が露わになった。お世辞にもかっこいいとは言え難いその見た目、銀色の鎧のようなものを身につけた、背中に翼を持ったHEROが現れた。

「シャイニング・フレア・ウイングマンの効果！このカードの攻撃力は、墓地のE・HEROの数だけ、300ポイントアップする。墓地には4体のE・HEROがいる。よって、シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は、3700！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン ATK 25
00 3700

「なら、遊夜の希望を砕いてあげる。罨カード、サンダー・ブレイク。手札を1枚コストに、カードを1枚破壊する…私が破壊するのは、シャイニング・フレア・ウイングマンよ」

サンダー・ブレイク：！上のほうに黒い雲が集まってきた…でも、オレの希望は消えない！！

「…オレは手札から速攻魔法、我が身を盾に、発動！ライフを1500ポイント払い、モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する。よって、サンダー・ブレイクは無効！」

遊夜 LP 1600 100

危ない危ない…雲は消え去った…それじゃあ、一気に決めるための準備をしよう。

「オレはセットされたモンスターを反転召喚」

反転召喚されたモンスターは、黄金色で赤いマントを羽織ったHEROだった…速攻で破壊されたけど。

「E・HEROキャプテン・ゴルドは、フィールド上に摩天楼スカイスクレイパー が存在した場合、破壊される。そして、墓地のE・HEROが増えたことで、シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力アップ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン ATK 37

00 4000

「これでフィニッシュだ!!! シャイニング・フレア・ウイングマンで、光帝クライスを攻撃!!! シャイニング・シューーート!!!!」

「…私の負けね」

クライスが光に飲まれた…そして、光が止んだ後には、姉さんの前にシャイニング・フレア・ウイングマンは立っていた。

愛 LP 3800 2200

「そして、シャイニング・フレア・ウイングマンの効果…このカードが戦闘によってモンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手ライフに与える。シャイニング・バースト!!!」

シャイニング・フレア・ウイングマンからより強い光が放たれて、姉さんを包んだ…そして、姉さんのライフが0になった

愛 LP 2200 0

「あわわ…しよ、勝者流明遊夜ナノーネ！（バカーナ、シニョーラ愛が負けるなんて…！は！もしや、知らぬ間に彼女が手加減を…）」

「ふう…ギリギリのデュエルだった…」

「ふふ…遊夜、知らないうちに強くなったわね」

「姉さん…本気出してない癖に…」

「このデッキで出せる本気は出したわ」

「まったたく…」

姉さん……このデツキはまだ序の口と言ってもいい……。姉さんの最強デツキはオレのデツキにとって天敵みたいなものだから……あのデツキには1度も勝ったことがない……。

「……………」

「……ぬあああああ！！遊夜〜！何書けばいいか訳分かんねーよ！！」

「お願い、人に聞かないで……書くことは自分で考えて……」

「あ、頭がおかしくなりそうっす……」

制裁デュエルから3時間後、現在オレ、十代、翔の3人は、絶賛デュエルレポートを執筆中……畜生、デュエルが終わった後、十代達がオレのところに駆け寄ってきて、そのタイミングで鮫島校長が罰のデュエルレポート10枚を、しかも提出期限は明日までって言うあの意味処刑宣言したよ……十代が勘弁してくれって言ったたら、2倍になったよ……。畜生、レポートなんて大っ嫌だあああああ！！！！

「……十代、やっぱあたしが教えながら書いたほうがいいんじゃないの？」

「うっ……頼む」

「……翔君、手伝おうかしら？」

「お、お願いします……」

……黑夜さんと天上院さんも動員してレポート現在進行中……隼人君はペナルティなしだったけど、ドローパン買って来るといってさっき部屋を出た……それにしても……。

「十代……君のせいだからね」

「オレのせいだよ……」

「ボクもそう思うっす……アニキがあんなこと言ったから、そもそも10枚だったレポートが20枚になったっすからね……」

「確かに……ああいう言葉を蛇足っていうのよね……」

「だ、ダソク？ダソクってなんだ？」

「やっぱ十代は知らないみたいね……蛇に足って書いて蛇足……意味は余計なことをして損をするってこと」

「……ウガッ！なんか頭こんがらがってきたッ！！」

……十代……その後、9時になって黒夜さんと天上院さんが帰り、レポート執筆作業は、オレや翔は夜中に、そして……十代は、オレや翔達が手伝ってでも明け方までかかった。

第07話 制裁デュエル 遊夜VS女帝の支配者（後書き）

日菜「…やっぱり十代蛇足しらないか…。っと、それじゃあ今回はオリカ紹介。今回は、遊夜が使った魔法カード、融合採取よ！」

融合採取 通常魔法

手札のカードを2枚墓地へ送り、発動する。

デッキから、「融合」または「フュージョン」と名のついた通常魔法を1枚手札に加える。

遊夜「融合系統のカードをサーチできる魔法カード。手札2枚をコストに融合系統の通常魔法を手札に加える…融合系統の通常魔法を融合しか入れないなら融合賢者のほうがいいけど、ミラクル・フュージョンとかのカードを入れているなら、採用するのもいいかもね。ただ、これで手札に加えられるのは通常魔法、永続魔法の未来融合・フューチャー・フュージョンや、フィールド魔法、フュージョン・ゲート、ここでのオリカである速攻魔法、スパイラル・フュージョンは手札に加えられないから注意よ。まあ、手札コストが2枚で融合を手札に加えるから、間違えばハンド・アドバンテージをかなり失うことにもなるから、そこも注意」

若干グダグダ感をこの話に感じます。なお、今回は番外編を書こうかと考えております。それでは、感想、指摘、誤字や間違いの指摘等を、お待ちしております。

番外編 十代の夢（前書き）

三沢「たまここか…作者、オレの出番はまだか？」

アトラン「次回でいいかい？」

三沢「結局出ていないのか！！」

アトラン「カイザー亮も名前しか出ていないぞ」

カイザーと三沢が名前しか出ていないという状況をどうにかしたい
今日この日。それでは予告通り番外編、始まります。

番外編 十代の夢

(作者視点)

ある日の午後、アカデミアのある島の森にある、レッド寮に近いところに、日当たりのいい、小さい原っぱのようになっている場所がある。そこには、オリシス・レッドの制服を着た生徒、遊城十代が完全に熟睡している。おそらく、授業は午前中だけだったのか、本日は休みなのだろう。口からは涎を垂らし、いい夢でも見ているのか、だいぶ幸せそうな寝顔である。

(十代視点)

「ん……ここは……」

オレの意識が遠退いたと思ったら、どこだ……?なんか、宙に浮いてるし……ってかいつの間にか夕方になってる……?どういうことだ……?夕方になっているのは別にいいとして……。

「いつたい、どこなんだ?」

一応、浮いてるから下を見てみた……どっかの河川敷みたいだな……。でも、この河川敷、どっかで見たような……。

「ん?あれは……」

オレが下を見ていたら、誰かが走ってくるのが見えてきた。すると、

オレの体が下へと向かい始めた。

「（な、なんだ？いきなり。それにしても…どうなってんだ？？）
いったいどうなってんだよ…。下に向かって、走ってきた誰かの姿
がはっきり見ることができたとき、オレは驚いた。」

「！…小さいころの…オレ？」

どうして、小さいころのオレが？今のオレは、ここにいる…！そう
いやこの河川敷、どこから見たと思ったら…。

「うちの近所にある河川敷だ…」

道沿いに木があるし、小さいオレから見て前にある橋、そしてその
近くにカードショップ…うん、間違いない。ってそーいやあ…やけ
に桜が咲いてるな…。ってことは、ここは春なのか？？オレが疑問
に思っている、小さいオレが止まり、オレも自然に止まった。ど
うした？って思ったけど、小さいオレは、川のほうを見ていた…何
かあるのかと違って、オレも見てみた…誰か…いるな。

「（髪長いみたいだから…女か？それにしても、あんなところで何
してんだ？？）」

小さいオレと共に、オレはその方向を見ていた。すると、女は立っ
た…結構小さいけど…小さいオレと同年ぐらいか…？…？…？

「（川に入っっていった？…って、ちょっとまずいんじゃない？）」

オレの嫌な予感でもあたったのか、女の子は川を進んでいった…

！あのままじゃ、溺れちまう！！オレは、女の子を助けようと思っ
て、動ごいた…あれ？

「な、なんで前に進まないんだよー！！」

どうなつてんだ！？なんでオレ、体自体は動くのに、前には進まな
いんだ！！？このままじゃ、マジであの子溺れちまう！！オレがど
うしようかと焦っていたら、小さいオレが川目掛け走っていた。

何してんだよー！！

小さいオレが進むと、オレも進んだ。小さいオレが進むと、オレも
進むみたいだな…そして、小さいオレも川へと入っていった。そし
て、女の子に追いついた…のはいいが…。

あ、あれ？あ、足つかない…だ、だれか助けてー！！！！

………やっぱりこれ、オレも流されるのか…？浮いてるけど、流さ
れるのか？…一応、ここのものには触ることはできないみたいだ
から、何も出来ず、流されていると、ある人が川へと入って、小さ
いオレと女の子を掴んで、助けてくれた。

た、助かった…ありがとな！

どういたしました

…今、こんな状況だから思えるだろうけど……小さいころからこん
な感じだったんだな、オレ。それにしても…女の子のほう、何も言
わないな。

そっいえば、なんで溺れていたんだい？

え？いや、こいつが川入って行って、そのままだとおぼれるって
思っで、助けに行ったらオレもおぼれた
なるほど…それで…君はなんで川に入ったんだい？

そういつて、あの人は女の子に質問した…女の子のほうは、まった
く喋らない。本当に無口だな…。

へ、ヘックション！！

あ、大丈夫かい？タオルあるから、しっかり拭いてね

そういつて、あの人は持参していたカバンからタオルを取り出した
…濡れてないから…カバンはやっぱり、置いていったみたいだ…。
あの人からタオルを受けとったオレは、頭を拭き始めた。そして、
あの方はさらに、カバンからタオルを取り出し、女の子に差し出し
た。

ほら、君も風邪引くといけないから、体を拭いたほうがいいよ

…

女の子は、まったく受け取ろうとしない。すると、あの方は仕方な
いというかのように、女の子の近くまで行き、優しく拭き始めた。

！

ほら、暴れない…暴れないで

…何故か、女の子は暴れている……なんで暴れているんだ？オレが
疑問に思っていると、女の子があの人を振り切り、また川に向かお
うとした。

！ま、待てよ！またおぼれたらまたぬれるんだぞ！

そういつて、小さいオレが女の子の腕を掴んで止めた。女の子はしばらく抵抗していたけど、諦めたのか、大人しくなった。それでも、小さいオレは手を離さなかった。すると、女の子が、口を開いた。

………てよ

？

死なせてよ！私なんて、生きてる価値も、意味もない！

…自殺願望？見た感じ、小学生ぐらいだけど…そんなに小さいときにそんなこと思うなんて…どうしてだ？

！…？でも、どうしてそうだって言えるんだ？オレだってお前だつて、この人よりもぜんぜん生きてないぜ？

…

なあ、だまつてないでさ、なんか言えよ。だまつてちゃ分かんないつて、オレのとーちゃん言つてたぜ？お前のとーちゃんは、なんて言つてた？

いない…

？いないつて…とーちゃんが？

もつ…私には…何も…何も…何も…ない

………いつたい、この子に何があつたんだ？何もないつて、いつたい…？オレが疑問に思つてると、あの人が口を開いた。

嫌かもしれないけど…話してくれないかい？本当に嫌なら、話さなくても大丈夫だから

…

何も言わないつてことは…本当に嫌みたいだな。まあ、別にいいか。

……本当に嫌みたいだね。それじゃあ、少しお説教染みた話になるかもしれないけど、いいかい？

？まあ、いいぜ

…

それじゃあ話すよ。まず、君は生きている価値も意味もないって、言ったよね。でも、それは違うと思うよ

？

意味や価値のない人間なんて、本当はいないんだ。ただ、考え方が、たくさんの人は違うんだ。ほら、君達2人だって、考え方は違うはずだよ

あの人の言葉に、小さいオレは大きく頷いた。女の子のほうは、小さく頷いた。

オレは、死のうなんて考えたこと、ないぜ

…

うん。人は、考え方とかが違うからこの人は価値がないって決め付けたり思ったりするんだ。それに、生きていれば、辛いことも楽しいこともたくさんある。それに、君はボクよりずっと幼いから、まだ生きている意味がないって早とちりしているだけかもしれないよ

？…どういう…こと？

女の子が口を開き、小さいオレ、後オレも、黙った状態であの人の話を聞いた。そして、あの人は少し間を置いて、また話し始めた。

ボクが生きている意味っていうのは…実はボクにもまだ、ボクが生きている理由なんて、分からないんだ

へ？

もう少し生きたら分かるかもしれないけど、今は分からない。君は、自分が生きている意味なんてないって言ったけど、それって、分からないってことと、同じだと…ボクは思うんだ

ん…あ、たしかにそうかも

…

…オレが生きてる意味…か。考えたことって…多分無いな。再びあの人が少し間を置いて、話を続けた。

それに、君は何も無いとも言ったよね。でも、今はこうして、ボクらがいる。それに、君には完全に何も無いって訳じゃない。もし君がさっき言った何もないの意味が、絆や人との繋がりが何もないって言うても、今、君はボくらとの繋がりが出来ている

…そんなの、出来てない

いや…君がそう思っても、ボクやこの子は、君と出合った。それだけでも、小さな繋がりだと思うよ

…

それに繋がりは、生きていくうちにドンドン増えていくと思う。あ、でも…消えちゃう繋がりもあるかもしれない。でも、繋がっていた…その事実、例えば忘れたとしても事実には変わらない

へ〜

…

繋がりが。今のオレの繋がりと言ったら…やっぱり、家族とか…
…あ、中学のときのダチも入るな。あいつら元気にしてるかな。
それに…翔、隼人、遊夜、三沢、カイザー亮、明日香達、今はいないけど、万丈目…他にも、たくさんいるな…あの人は、女の子と小さいオレの反応を見て、少し微笑んだ。

まあ…これはボクの考えだから、君らの考えとは違っているの

は分かっている。でも、これだけは言えることがある？

君が死んじゃったなら…きっと、悲しむ人がいる。どこにいようと、悲しむ人がいるはずだよ

…

悲しむ人が…きっと、オレが死んじまったら、さっき繋がりにあげたヤツ全員悲しみそうだな。あの人が一息ついて、立ち上がった。

……ボクの話は終わりだよ。…さて…暗くなってきたし……送っていてもいいかい？

オレは1人でも帰れるぜ！

頼もしいね。でも…服、濡れてるよね

あ……あはははは…

ボクと一緒に行って、事情を説明するよ。それに…怪しい人が出てきたら大変だ

確かに…

まあ、いつの時代でも怪しい人にはついて行くなだよな。そして、あの人は女の子に手を差し伸べた。

早く帰らないと、誰かが心配しているよ

…

女の子は、あの人の手を握った。小さいオレはもう握ってる。そして、小さいオレとあの人が、女の子で歩き始めた。……あの人に、それぞれが道案内をして。それと、あの人のかばんは、あの人が肩から提げている。

まず女の子の住んでるところについた…って…。

ここって…孤児院？

？こじいん？？

あ…君は孤児院を知らないみたいだね。孤児院っていうのは、親や親戚がいない子供達が住む場所だよ

へー。じゃあここに住んでるのか？

…うん

案外近所だな…。駅に行くときこつち行くほうが早いから通るからな。オレがのんきなことを考えていると、女の子がかけてきた。

あやちゃん！ああ、大丈夫？こんなにずぶ濡れに…

あの…

？アナタは？

実は、この子達が溺れていて、助けました

本当だぜ。それと、オレはそいつ助けようとしたんだけど…おぼれちった

…そついや、名前分らないままだな…。女の子、多分…あやって
いうのはどこかでつくんだろな…。

それはどうも…。さあ、あやちゃん。早くお風呂に入って温まり
ましようね

…うん

そついつて、女の子は女の子の人に連れられ、建物へと入っていった。
それを確認した小さいオレとあの人は、小さいオレの案内の元、オ
レの家へと向かった。…オレの家に着いたのは、20分後。あの人が
オレの家のインターフォンを押して数秒後、オレのお袋がお玉を

持って出てきた。まあ、オレが言うのもなんだけど…かなり美人なんだよな。オレのお袋。

どちらさま…あら、どちらさま？

えっと…この子と、後、今はいませんけど、女の子が溺れていて、助けました

へへ…女の子助けようとしたらおぼれちった

あらあら、それは大変だったわね。十代、早くお風呂に入りなさい

おう！

あ、それじゃあボクはこれで…

そういうと、あの人は帰ろうとした…でも、オレのお袋は、かなり厄介な性格なんだよな…。

まあ、そんなに遠慮なさらずに、あなたもお風呂に入って、それに、お夕飯も食べていきなさい

あ、えーっと、その、あの…

…うちのお袋って…マイペースで、どういうところがそうなのかは分かんねえけど…かなりの天然なんだよな。

あ、あの…そろそろ帰らないと。家に連絡してないので、ボクのじいちゃ…祖父が心配しますから

そうなの…それじゃあ、名前だけでも教えてくれるかしら？

名前ですか？ボクの名前は…武藤遊戯です

そう…特徴的な…モミジみたいな髪型をした、キングオブデュエリスト、遊戯さん…。それにしても、お袋、早く開放したな…。そういえばお袋、家族が心配するって感じのこと言ったら、簡単に開

放するからな…。

あ、そうだ！

？十代、どうしたの？

遊戯さん！

？なんだい？？

助けてくれて、ありがとございました！

「ん…ふあ〜…ここは…日光浴してたところか」

…なんか…やけにリアルな夢だったな…。まあ、とにかく…。

「帰るか…」

夢のことは一旦置いておいて、オレはレッド寮に向かった。

『クリクリ〜！』

「？ハネクリボー、どうした？？」

『クリー、クリクリ…クリー！』

…ダメだ、さっぱり分かんねえ。何を言いたいのかさっぱり分かんねえ…。ハネクリボーの言うことって、クリーとかって言ってるようにしか聞こえないんだよ…。実際そう言ってるけど…。

「…！…！…夢…」

(??視点)

…すごく懐かしい夢だったな…今考えたら、あのまま死んでたら、今はなかったかな。それにしても…。

「繋がりは増えていく…か」

『…繋がり、どれくらい?』

「うん、たくさん…かな?直接会っていない人とか、多いと思うけどね」

そう言つて、私は近くにいる、どこか私に似ている、同い年ぐらいの半透明の女の子と喋っている。

「あ、もうそろそろ時間かな…ちょっと急がないと…」

…今の私がいるのは、キングオブデュエリスト、武藤遊戯さん…それに、あの子の彼のおかげ…そういえば、彼、今どこにいるんだろ…?

「ん?翔、どうした?」

「アニキ!今から、彩美ちゃんの生ライブがあるっす!」

「彩美?誰だ??」

「確かに…誰なんだな、その、彩美って」

「え!ふ、2人とも、知らないっすか?」

「ああ…」

「もしかしたらどこかで聞いたかもしれないけど、知らないだなあ」

(十代視点)

…部屋に入ったら、翔が部屋に取り付けてある薄型のテレビ（なんでも学園のオーナーが、もうすぐ地デジが終了するからって、各寮の部屋1つ1つに1つづつ、地デジ対応のテレビと、アンテナを取り付けてくれた）の真ん前に居座っている。
そして翔は、オレらが知らないことが衝撃的だったのか、声を荒げて言い放った。

「彩美ちゃんは、今超絶的人気の、アイドルデュエリストですよ！
！」

「アイドルデュエリスト？ってことは、強いのか？」

「もちろんっす！見たこと無いシリーズに、そのシリーズにある知らないカテゴリのモンスターを使うっす！」

「まあとにかく…強いならデュエルしてみてー！！！」

「…十代らしい答えなんだな」

番外編 十代の夢（後書き）

日菜「…今回、デュエルないわね…オリカ紹介もキーカード紹介もちょっと無理だろうし…」

遊夜「まあ、別にいいとは思うよ…それと、今回オレと黒夜さん出てないからね…」

日菜「あんたは名前であてでしょ…こっちは出てすらいないから」

遊夜「あはは…。それと、今回であ少女、彩美…今後出てくるオリキャラだそうです」

日菜「いや、それってネタバレなんじゃ…」

アトラン「いやー、別にいいんじゃないかなって思ってた…」

遊夜「まあ、番外編っていうならネタいっぱいあるけどね」

彩美に関しては、2期から本格参入するオリキャラの1人です。次回回は本編へと戻り、展開としては、オリジナルです。

第08話 教えて！遊夜先生ー！（前書き）

遊夜「今回の話はデュエル描写一切ないとのこと。デュエルは
しますけどね。」

後、ここで三沢大地救援策（仮）に続いての企画が発表されます。
その企画とは…。

『読者からオリキャラ募集企画』という名前の企画です。これは、
作者がオリキャラ考えるのが面倒という訳ではなく、自分のオリキ
ャラだけでは何かワンパターンになってしまうと作者が考え、読者
から募集してみようと、企画を立ち上げました。なお、オリキャラ
募集は、感想のみで受け付けます。

この企画に関しては、オリキャラ1人を選び、この小説に登場させ
ます。この企画は、作者が選び、決定した時点で募集強制終了と同
時に、企画強制終了となりますので、ご注意を」

ようやくとまともな企画を1つ立ち上げることができました。そし
て、今回は描写は無いものの、デュエルをします。

第08話 教えて！遊夜先生ー！

「え？オレに相談がある生徒が？」

「ああ、そうなんだ。だから、いいか？」

「別にいいけど…」

(遊夜視点)

授業が終わり放課後：特に用事のないオレは、部屋でカードを見ていた：それと、三沢VS万丈目のデュエルはアニメ通りで終わった：SALとは十代がデュエルをして終わった。そして、冬休みが近づいてきた時期に、三沢がオレの部屋を訪ねてきて、相談したい生徒がいるって言った。

「それで、その生徒っていったい…」

「オレだ」

ん？…何？髪の色違うけどスーパーサイヤ人が気をめっちゃ噴出していますよーという感じの髪型…って確か…。

「コピーデッキを使っているっていう、神楽坂君？」

「…やっぱり、噂になっているか？」

「案外ね…それで、相談って？」

「ああ…どうやったたら、コピーデッキじゃないオレのデッキができるー！」

「…はい？」

…えーっとつまり…「コピーデッキじゃないオレのデッキって」とは…。

「自分のデッキが作りたいうってことだね」

「ああ…最近、イエローのほうで評判の高い流明からなら、何かアドバイスが貰えるって思ってた…」

「でも……コピーを応用してそれ、出来るけど？」

「…え？」

「有名なデュエリストのデッキを真似したがるっていうのは、案外ある話だと思うよ。でも、基本的にデッキ内容が公開されない限り、そのデッキを完全にコピーするのは、案外難しい。そこで、不明の部分に自分が入りたいカードを入れる…まあ、これが応用かな」

有名な人の真似をしたがる…これは、案外パターンとしては可能性としてある。誰もそうしたいと思ったことぐらいあるはずだ。神楽坂がはっ！とした顔になったけど、すぐに眉間に皺を寄せた。

「！…いや……一応、オレもそれに当てはまるが…」

「じゃあ…派生デッキ…なんて、どうだい？」

「派生デッキ？」

「E・HEROで例えるけど…E・HEROにある派生の1つに、フェザー・パーミッションという系統のデッキがある」

「フェザー・パーミッション…パーミッションっていうと、カウンター罠とかを使って、カードの効果を無効にする戦略だよな」

「正解。フェザー・パーミッションは、通常モンスターであるE・HEROフェザーマンと、フェザーマンがいることで発動できるカウンター罠、フェザー・ウィンドによるデッキだよ。案外、いろいろなギミックが搭載できるみたいだよ」

実際オレが使った訳じゃない…デュエルモンスターズW といふサイトで見つけた。まあ、案外面白い戦術が生み出せるかもしれないな…。

「それで、いろいろなギミックとは…」

「いや、そこは自分でデュエルモンスターズW　？で検索してくれ。あんまり詳しく見た訳じゃないから…。それに、カイザーのデッキでも派生できるかもしれない」

「カイザー！？あの、カイザーのことか？」

「合ってると思うよ…まず、カイザーのデッキは機械族…それを取り上げれば…マシナーズ・フォートレスが相性いいと、思うよ」
「マシナーズ・フォートレス…確か、ストラクチャーデッキに入っているカードで、手札の機械族を合計レベル8になるように墓地に送って特殊召喚できるヤツだよな」

「ビンゴ。フォートレス自体も共に墓地に送っても、フォートレスが墓地からも同じ効果で特殊召喚可能だから、機械族には相性のいい1枚だよ」

「なるほど…よし、やってみる！ありがとう、流明！！」

そう言っつて、神楽坂はオレの部屋を出た。三沢は、まだ残っている。

「？何か用事でも？」

「いや…なんでもない」

そう言っつて、三沢は部屋を出た…さーて…。

「どうしてよっかな…」

多分、神楽坂が遊戯さんのデッキを使ってデュエルすること、無くなるかな。まあ、それはそれでいいか。神楽坂犯罪者にならなくて済むし。オレは少し悩んだ拳句、ベッドへと向かった。すると、部屋のドアが勢いよく開いた。

「遊夜！デュエルしようぜー！！」

「じゅ、十代来た…」

…その後、十代とデュエルして…1時間近くで8回中4敗した…十代に負けた回数がまた更新された…。はあ…。あのドロ―運なんとかならないのか…。

十代が自分達の部屋に戻ったのは、十代がオレの部屋に入ってきて、大体1時間と45分経った後ぐらいだった。そして、十代が部屋を出て10分後、誰かがオレの部屋のドアをノックした。

「はい。どちらさま…って…え？」

ドアを開けて確認したら…なんだか大きく広がった髪と、ブルー女子の制服が目に入った…確か…。

「枕田ジュンコさん…で、合ってるかな」

「ええ…遊夜、ちょっと相談したいことがあるんだけど」

「えーっと…どんなこと？」

「実は…このデッキの扱い方が、いまいち分からなくて…」

そう言っつて枕田さんは、オレにデッキと思われるカードの束を渡した…えーっとどれどれ…これは。

「このデッキ…ジエムナイトデッキだね」

「ええ…偶然ネットで見た動画で、このデッキがものすごい展開して…デッキパーツもいくつか持っていたから、いろいろ買って、デッキを作ったけど…分からなくて」

動画で見てもすごい展開…か。まあ、ジェムナイトは、オレや十代の使うタイプのE・HEROとかと同じ、融合を主体としたタイプのデッキの可能性があるだろうし、デッキにジェムナイト・フュージョンが3枚あった…なら。

「…ジェムナイトは、ジェムナイト・フュージョンという専用の融合カードを使って融合モンスターを召喚するデッキ。さらに、ジェムナイト・フュージョン自体、墓地のジェムナイト1体を除外することで、墓地から手札に回収できる。だから、除外されたジェムナイトを特殊召喚できるような異次元からの帰還とかいいコンボだと思っよ」

「なるほど…他に、何かあるの？」

「タレット・フュージョン 廃石融合を使って、ジェムナイト・アクアマリナかジェムナイト・アメジスを融合召喚すれば、エンドフェイズに破壊されて、効果を発動できる。まあ、一種のエンドサイクみたいかな」

「そんなことができるのね！」

「それに、ジェム・タートルを入れてジェムナイト・フュージョンをサーチして、それを使って、このジェムナイト・ジルコニアを融合召喚するのも、いいかもね」

「いろいろな使い方があるのね…ありがと、遊夜。よし、早速デッキ調節よー！！」

「…なんだか、今日は相談者が多いな……。さて、ゆっくりしよっかな…オレがベッドに横になって数秒後、またドアがノックされた。」

「…はあ…どちらさまですかっおおおおお！！！！！！！！！！」

「突然来てすまない」

「か、かかかか、カイザー！？な、なんで、オレの部屋なんか…」

なんでカイザー亮がここに!?!まさかカイザーも相談があるとか
!?!?

「いや、最近お前がイエローの生徒に、デュエルに関してアドバイスをしていると聴いてな、かなり評判がいいらしい話だから、少しアドバイスを貰いに来ただけだ」

「な、なるほど…でも、オレがアドバイスできることって少ないんじゃない…」

「いや、オレも完璧ではない。それに、少なくとも構わない」

「そ、そうですか…」

カイザーがアドバイス貰いにくるなんて誰が想像できるか…。予想外のカイザーの頼みごとを受け入れて、オレはカイザーのデッキを見た。……うーん…。

「どう指摘したらいいか…カイザーのデッキは融合主体の機械族で、サイバー流デッキ。機械族だからマシナーズ・フォートレスが入るかもしれないけど、相性はどうかの問題になるでしょうし…あ、このデッキ…ライフコストを必要としたりするカードが多いですね。となると、やはりライフ回復やダメージ回避と言ったカードを入れてみたらどうでしょうか。例えば、パワー・ボンドのデメリット回避に一時休戦やレインボー・ライフ、それにこのデッキに既に投入されているサイバー・ジラフですね」

「そうか。それじゃあ…このデッキにカウンター罠を入れるとしたら、何を入れたらいい」

…?ちょっと待てよ…。確か、サイバー流はカウンター罠をあまり使わないって聞いたような…。

「確かサイバー流って…その手のカードはあまり使わないって聞きますが…」

「いや、正確には…カウンター罠を使わない者が多いと言ったほうがいいかもしれないな」

「?とういと…?」

「カウンター罠は、うまくいけばピンポイントで相手のカード効果を無効にできるが、それよりも効率のいいカードを入れる…そういつたことで、カウンター罠が入れられていない…後は、どのデッキにも入れることができる魔宮の賄賂、神の宣告、神の警告は、カード自体の値段が高い、入手しにくいといったことも背景にあるだろう」

「確かに、賄賂も神宣も神警も、値段が高くて手に入れにくい…賄賂は確か2000円近く、神宣は4000円代、神警は2500円前後だったかな…。うん、すごく高いな…。」

「確かにそうだった凡庸性の高いカードは高かったりしますからね…まあ、カイザーのデッキなら…神の宣告なら問題ないんじゃないですか?」

「…ライフコストが多くなりそうだが…確かに、そうだろうな」

「神の警告に関しては、ライフコスト2000固定っていうのが痛い部分ですね…神の宣告は、半分払えば使えますから」

「確かに…そうだったな」

「それと…」

「……………遊夜」

「?なんですか??」

「今回のアドバイスのこと、礼を言っぞ」

「いや、オレはただ自分の出来ることをやっただけです」

「そうか……。くれぐれも、ここに来たことは誰にも言わないでほしい……。ブルーの人間には、レッドやイエローを見下している生徒が大勢いる。おそらく、オレがここに来たことが知られれば、いろいろとうるさいだろう」

「分かっていますよ」

「……それじゃあオレは帰る。今回のこと、2回目だが、礼を言う」

そう言つて、カイザーはオレの部屋を出た……。それにしても……。

「今日は意外な人が結構来たな……。でも……。なんでだ……。？」

オレは、何故意外な人が相談に来たか考えた……。そして、1つの考えが、思い浮かんだ。

「そういえば……。今月の月一試験……。まだだつたつけな……。確か今回は実技だけって言つてたような……」

だとしたら……。相談これからもつと来るかもしれないな……。オレがそう思つて、カードの組み合わせについて考えていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「……さつそく誰か来た……」

どんどん相談者来そうだな……。ここには人気占い師いませんよ……。オレはそう思つて、ドアの近くへと歩いていった。

「…っ、疲れた…」

カイザーが来て2時間…。それまでの間に、相談者が7人も来た。その中にブルーの生徒もいたし…。比率はブルー1、イエロー4、レッド2。さすがにサイクロンで永続以外の魔法・罫の効果を無効にできないことはしっかり分かってたけど。でも…。

「（さりげなく相談に来たブルー生徒よりも相談に来たレッドの先輩2人のほうが明らかに強いと思ったのは間違いだろっか…）」

うん、やっぱり威張って慢心しているブルー生より、どん底でも努力しているレッド生のほうが強いのかな…。そういえば…。

「女子のほうは枕田さん以来誰も来てないけど…どうしてんだろな」

（日菜視点）

「そうね…獣族っていうことなら…いつそレスキュー・キャットを抜いても充分大丈夫なはずだけど…」

「そ、それはちよつと…」

…今現在、少し融通の聞かない友達、ももえにアドバイス中…ジユンコはなんでも、流明遊夜にアドバイス聞いたみたい。なんか妙に張り切ってたけど…。

「じゃあやっぱり、ハンター・ライコウを入れることね。それと、レスキュー・キャット入れるなら、二重召喚デュアル・サモンとか、一気に生け贄召

喚に繋がられるような構築にしたほうがいいわね…あ、いつそ冥界の宝札軸にしてみる？」

「…やめておきますわ」

「…ここまでデッキ要素を拒否されるって…。やっぱり画面の外から見るのと現実とは違うわね。ま、別にいいけど。」

「というより…もう本当に冥界の宝札軸の獣族にしてみたら？少なくとも、今よりマシにはなると思うけど」

「…まあ、日菜さんがそこまでおっしゃるのなら…でも、獣族の最上級クラスのモンスターっていったい…」

「最上級を獣に拘る必要はないから…」

やっぱり冥界の宝札軸の獣族って言ったのが間違いみたいね。冥界の宝札の最上級に、レスキュー・キャットの効果や、後オマケでレベル・ステイラーを使って生け贄要員を揃えるっていうデッキって言ったほうが…うん、冥界の宝札軸獣族のほうが短くていいわね。

「ま、何を使うかはももえ次第。あたしは特に何も言わないわ」

「…コスモ・クイーンはどうでしょう」

「思い出のブランコとか追加したほうがいいのかもしいわね」

第08話 教えて！遊夜先生ー！（後書き）

日菜「殆どが遊夜のアドバイスの回だったわね…。え？今回のキーカード…ってあるの…？えー、今回のキーカードは…。

マシナーズ・フォートレス 機械族/効果 地属性 星7 AT
K 2500 DEF 1600

このカードは、手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚できる。

このカードが戦闘によって破壊され、墓地へ送られたとき、相手フィールド上に存在するカードを1枚選択し、破壊する。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが、相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

日菜「マシナーズ・フォートレス。機械族には相性がいいであろう1枚ね。手札の機械族をレベル8以上になるように捨てれば、手札が墓地から特殊召喚できる強力なモンスター…墓地からも特殊召喚できるから、フォートレスと機械族1体を墓地へ送って特殊召喚！なんていうプレイングが可能よ。

それに、戦闘破壊されたときの破壊効果、効果モンスターの対象になったときのハンドレス…特殊召喚機構に加え、その2つが組み合わせると強いわね。

まあ…弱点はやっぱり、除外ね。それも次元の裂け目やマクロ・コスモスの被害を一番受けるわね。戦闘破壊されたときの効果は、墓地へ送られなくちゃいけないから、除外には注意ね。バウンスは…このカードの前では…多分、その場凌ぎね」

と、言うわけでオリジナル展開を入れてみました。それでは、感想、

指摘・誤字等を、お待ちしております。

第09話 転校生 ちなみにレイじゃありません(前書き)

遊夜「転校生って…作者、転校生だれ？」

アトラン『本編で確かめるべし!』

遊夜「…あのヤロウ…似てないハリボテにボイスレコーダー仕込んでやがった…」

??「それでは、始まります」

遊夜「うわ!い、いきなりでないで…」

第09話 転校生 ちなみにレイじゃありません

(日菜視点)

今現在、冬休みが終わって、始業式が終わった後。生徒全員、一旦だけどそれぞれが自分のクラスへと集まった。ちなみに冬休み最後の月一試験：相手が流明で、ギリギリのデュエルだった結果、流明が運命の分かれ道使って：どっちも裏で引き分け：なんか納得できない。それと…。

「クロノス先生：遅いわね」

「確かにそうね。クロノス先生：授業内容はともかく、時間に関しては開始と終わりまでしっかりとする先生のはずよね」

「今までそうだったけど…どうしたんだろ？」

こっちのクロノス先生は、授業内容は：多分いいほうかな：本当にいいほうか分からないけど。あたしと明日香が話しをしていると、いつもの通路からクロノス先生が来た……………ん？んん？？Wh y????

「? いったい誰かしら、彼女…」

「…普通に見覚えあるんだけど」

「……………知ってるの？」

「まあ…ちよつとね」

あたしと明日香が少し会話をしたら、クロノス先生が咳払いをした。他にも喋っていたヤツはもちろんいたけど、さっきのクロノス先生の咳払いで全員喋るの止めた。

「今回、シニョール、シニョーラ達に集まってもらったノ〜ハ、新学期の授業内容についてト、この学期から共に授業を受ける転校生を紹介するノーネ。自己紹介は、自分でしてもらいまスーノカルボナーラ」

…なんでカルボナーラ…。なんでカルボナーラチョイスした。あたしが心の中でそう突っ込み、転校生をまた見た。メガネをかけて…うん、ああいう色って青緑よね、多分。とにかく…青緑色の、首近くまで髪を伸ばしている。それが結構特徴ね。

「原麗華といます。みなさん、よろしくお願いします」

原麗華…彼女は、そう言ってお辞儀をした。そして、クロノス先生が指定した席へと向かった……流明の真後ろ……？

「（なんであいつ固まってるだろ…謎の現象？）」

何故か流明が一切動いていない。原さんが横を通ったときでも前を向いたまま。なんか衝撃的な事実でも見つけちゃったのかしらね。

「（ま、いつか。後で聞きだせるし…）」

そう思った後、クロノス先生の話のある程度聞いて、ある程度聞き流した。

（遊夜視点）

「」

..... Why? Why? Why? ?
? Why? W...いた!

「う」

「いつまでそうやってバカみたいに前向いた状態で座っているつもりですか? もうクロノス先生の話は終わっています」

「..... いやさ... うん。1つ、言ってもいいかい?」

「だいたい言うことは分かりますが、どうぞ」

「... 転校してくるなら転校してくるって事前に言ってよ... リアクションとか反応とかにもものすごく困る」

「そこはタイミングの問題ですね... 後は、リアクションに困らせるというのもし」

..... なんだろ、頭痛くなってきた。だいぶ冷静になってきてるけど、えーっと.....。

「? 遊夜、転校生と知り合いなのか?」

「.....」

「? 遊夜?? おーい、遊夜??」

「今話しかけても無駄だと思います。多分頭の中混乱しているでしょうから」

「なんだかすごく確信ついた言葉っす... そっいえば、妙に親しげに話していたっすけど... 原さんと流明君は知り合いっすか?」

「はい。私と遊夜は幼馴染です」

..... あれ? 十代達いつの間に..... ってそっだ.....。

「麗華、1つ聞いていい?」

「…多分言いたいことは、どうしてここに転校してきた…そうでしょう?」

「せ、正確に正解…」

麗華、今回は正確にオレの質問事項当ててくるな…。オレが表情で苦笑をしていると、麗華が少し咳払いした。そして、話始めた。

「簡単に言いますと…何か足りない…その言葉がピッタリ当てはまりました」

「?それってつまり…行った高校で、何か足りなかったってことですか?」

「はい。高校に進学したのはいいのですが、何かこう、心に穴が空いた…ではないですが、何か足りない…そう思って、考えてみた結果、足りないものが何か分かりました」

「?それってなんだ?」

「教えてほしいんだな」

足りないもの…確かになんだろ。十代達が答えを求めたからかは分からないけど、麗華が口を開いた。

「案外、単純なことでした。遊夜との、毎朝の軽い会話です」

「…へ?」

「どういうこと…なんだな??」

えーっと…Why?まさか、オレとの軽い会話をするために転校してきたとかじゃないよね…?

「おそらく、いつの間にかその会話がおまじないみたいになっていたかもしれない。幼い頃から朝の会話はほぼ毎日ありましたから」

「えーつと…つまり…オレとの軽い会話をするために転校を？」

「それも理由にはありますが、もう一つは、父と母の勧めもありますね。おそらく、先ほどの理由と組み合わせり、相乗効果が発揮されたのでしょう」

「（た、単純だ…）」

オレが若干呆れていると、まったくお構いなしの十代は、何故かキラキラした目で麗華を見ていた。

「オレ、遊城十代！難しい話はよく分かんねえけどさ、とにかく、デュエルしようぜ！」

「い、いきなりですか…」

「まあ…十代はこういうヤツだから…アハハハ」

オレが苦笑いをしていると、先生が近づいてきた。…多分、校舎の案内かな。麗華は転校生だし。

「…デュエルのお誘い、ありがとうございます。しかし、校舎の案内のほうを優先したいので…午後の2時ぐらいには大丈夫だと思います」

「そうか！よし、さっそく帰ってデツキ調節だー！！！」

そういうと、十代はもうスピードで走っていった。途中で誰かにぶつかりませんようにと、オレは心の中で願った。そして、十代の後を追うように、翔と隼人も走っていった。あのスピードで十代に追いつくのは…無理かな。

「？遊夜はいいの？」

「まあ、気楽に行かせてもらおうよ」

「…そういえば、レッドの制服を着ていますが…遊夜の実力ではイ

エラーやブルーに上がれると思いますが…」

「いや、ちよつとね…」

…言えない。1回目の昇格可能性を捨てて、さらに退学になりかけた影響で今年度中に昇格できる可能性がもうないって。

「それでは、また後で」

「うん。それじゃあ」

そう言って、オレと麗華は分かれた。ちなみにその後オレは、購買部に行ってドロパンとパック購入だ。

「んじゃあ…ドロ。いただきます…お、鮭フレークパン…？カード…ま、まさか…」

購買部でドロパンを食べていると、パックを見つけた。中を開けてみると…。ジェノサイドキング・サーモン、ジェノサイドキング・デーモン、海、超古深海王シーラカンス、超水圧…明らかに最初だけネタだ…ジェノサイドキング繋がりだよ絶対…。

「もう1つ買おうつと」

その後、オレが食べたドロパンは、最初のものを含め、3つ。後に当たったのは、焼き鮭パン、サーモン刺身パン…いやー、こども好物当たりまくるとは。十代並じゃないけどこのドロ運高いね！その後最近発売されたパックを7つ買った。さーてと、何が入っているか、部屋に戻って確かめるか！

「…それほど人は集まってる訳じゃないみたいだね」

「あ、流明君」

「まあ…軽い噂になっている程度みたいなんだな」

午後の2時…あまり多くは無いが、生徒がそれなりに集まっている。デュエルフィールドには十代のみ。麗華はまだいない…か。

「原さん…どうしたつすかね？」

「まあ、校内案内だから、それに時間がかかっていると思う」

「なるほどなんだな」

隼人の言葉、その言葉と共に、駆け足で走ってくる足音が聞こえた。その音は、中央のデュエルフィールドへと、進んでいった。そして、音の正体…麗華が、デュエルフィールドに姿を現した。

「走ってきたけど…やっぱり校内案内に時間が…」

「まあ、それもあるけど、本当の理由は違うわ」

後ろから聞こえてきたのは、黒夜さんの声だった。見てみると、黒夜さんと天上院さんがいる。

「…なんかよく一緒にいるよね、天上院さんと黒夜さん」

「まあ、日菜とは姉妹みたいなものだから、知らないうちに一緒にいると思うわ」

「へー…それで、本当の理由って？」

「デッキ調節…そつちに時間かけてたみたいでね…しかも、慌てて道間違えていたんだって。そこをあたしたちが通りがかって、道案内してたって訳よ」

「な、なるほど…」

(麗華視点)

「やっと来たか。ま、別にいいけどな。とにかく、早くデュエルしようぜ!」

∴遊城君は典型的なデュエルバカと言えるでしょうか。私とのデュエルを楽しみに待っていたとでも言うのでしょうかね。

「ええ。さっそく始めましょう」

私はそういい、デッキをシャッフルした。∴遊城君は思い出したかのようにディスクにはめていたデッキを取り出し、シャッフルした。デュエルバカ以前にバカなのでしょうか、彼は…。ある程度シャッフルして、私はディスクにデッキをセットした。遊城君は、私よりも前にセットしたようで、準備万端でした。

「それじゃ、行くぜ!」

「望むところです」

「デュエル!」

十代 手札5 LP4000 麗華 手札5 LP4000

「オレのターン、ドロウ! ∴クレイマンを守備表示で召喚! カードを2枚伏せて、ターンエンド」

十代 手札3 LP4000

モンスター E・HEROクレイマン×1(守)
魔法・罫 セットカード×2

クレイマン…デッキはおそらく、遊夜と同じE・HERO…というところでしょう。…何故か遊夜がこの場合、フォレストマンを出しているそう…。まあ、それはいいとして…。

「私のターン、ドロ。…カードを2枚セット、さらに永続魔法悪夢の拷問部屋を発動。悪夢の拷問部屋は、同名カード以外の戦闘以外のダメージを相手が受けた場合、相手ライフに300ポイントのダメージを与えるカードです。さらに私はモンスターをセット、ターンエンドします」

麗華 手札2 LP4000

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 セットカード×2、永続魔法「悪夢の拷問部屋」×1

「行くぜ、オレのターン、ドロ！オレは手札から魔法カード、融合を発動！手札のスパークマンと、フィールドのクレイマンを融合！現れる、E・HEROサンダー・ジャイアント！そしてバトル！サンダー・ジャイアントで、セットモンスターを攻撃！ヴェイパー・スパーク！！」

胸の部分に青い玉がある巨人が、私のセットモンスターまで迫ってきた。そして、露わになったセットモンスターは…メカメカしいウサギ。そして、巨人が手の間に電流を流して、メカウサギを破壊する。でも…。

「メカウサギのモンスター効果、このカードがリバースしたとき、フィールド上のカードを選び、そのカードのコントローラーに、5

00ポイントのダメージを与えます。私は、サンダー・ジャイアントを選択。そして、ダメージが発生するので、悪夢の拷問部屋の効果で、さらに300ポイントの追加ダメージです」

「げーのあー!!」

メカウサーが大爆発して、遊城君まで衝撃がいったようです…そして、どこからともなくタライが遊城君の頭の上に落ちてきた…拷問部屋の効果によるダメージの演出でしょうか…。

十代 LP4000 3500 3200

「そして、戦闘によって破壊されたメカウサーは、デッキからメカウサーをセットされた状態で呼び出せます。私は、デッキからメカウサーを1体選択し、セットします」

「ふう…：ターンエンド」

十代 手札2 LP3200

モンスター E・HERO サンダー・ジャイアント×1（攻）

魔法・罫 セットカード×2

「私のターン、ドロ。私は魔法カード、浅すぎた墓穴を発動。浅すぎた墓穴は、互いのプレイヤーは墓地に存在するモンスターを選択し、セットした状態で自分フィールド上に特殊召喚します。私は、メカウサーをセットします」

「えーっとんじゃあ…：スパークマンをセット」

「それではターンエンドします」

麗華 手札2 LP4000

モンスター セットモンスター×2

魔法・罫 セットカード×2、悪夢の拷問部屋×1

「オレのターン、ドロー！…スパークマンを反転召喚し、バトル！
サンダー・ジャイアントで、セットされたメカウサーを攻撃！ヴェ
イパー・スパーク！！」

「なら、メカウサーの効果でデッキからメカウサーをサーチしつつ、
ダメージです」

「く…」。

十代 LP3200 2800 2500

「だとしてもどちらかを倒せば残りはフィールドの1体だけだ！い
っけ！スパークマン！さつき召喚されたほうのセットされたメカウ
サーを攻撃！スパーク・フラッシュュ！！」

「メカウサーの効果！」

十代 LP2500 2000 1700

「く…でも、もうメカウサーをサーチすることはできない…オレ
も攻撃モンスターがいないけどな。これでターンエンドだ」

「ならそのエンドフェイズ、リターン・ソウルを發動。このターン、
破壊されたモンスターを3体まで選択し、選択したモンスターを持
ち主のデッキに戻します。破壊されたのはメカウサーのみ。私は、
このターン破壊されたメカウサー2体をデッキに戻します」

「う、嘘だろー！！」

十代 手札3 LP1700

モンスター E・HERO サンダー・ジャイアント×1（攻）、

E・HERO スパークマン×1（攻）

魔法・罫 セットカード×2

「私のターン、ドロ。カードを1枚セット、ターンエンド」

麗華 手札1 LP4000

モンスター セットモンスター×1

魔法・罨 セットカード×3、悪夢の拷問部屋

「くっそー、オレのターン、ドロー！…オレは魔法カード、強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドロウする！…よっしゃー！！オレは手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合し、E・HEROフレイム・ウイングマンを融合召喚！」

「それなら相手がモンスターを特殊召喚したことで、手札からエクストラ・ヴェーラーを、守備表示で特殊召喚します」

「だとしてもいくぜ！バトル！E・HEROフレイム・ウイングマンで、セットされたメカウサーを攻撃！フレイム・シューーート！！」

「ちょ、十代！？」

…どうやら、遊夜は気付いたようですね。それでは、次のターン辺りで攻めますか…。

「メカウサーの効果！」

「だがその前にフレイム・ウイングマンの効果がチェーン発動するぜ！戦闘破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手ライフに与える！」

「ならそれにチェーンし速攻魔法、連鎖爆撃チェーン・ストライクを発動。このカード発動時に積まれているチェーンの数×400ポイントのダメージを、相手に与えます。積まれているチェーンは3つ。よって1200ポイントのダメージ。さらに連鎖爆撃チェーン・ストライクにチェーンし、積み上げる幸福を発動。チェーン4以降に発動できます。この効果で、デッキからカードを「ならそれにチェーンしてトラップカード、エレメンタル・

チャージ発動！自分フィールド上のE・HEROの数だけ、自分のライフを1000ポイント回復する。オレの場には3体のE・HEROよって、3000ポイント回復だ！」

十代 LP 1700 4700

「う…チェーンが遅い順番に処理していきます。まず、積み上げる幸福の効果で、デッキからカードを2枚ドロし、その後、連鎖爆撃チェーン・ストライクの効果からです」

「く…」

チェーン・ストライク
連鎖爆撃のカードから、3つの鎖が出てきて、遊城君に絡まり、爆発した…演出上ですが、大丈夫でしょうか……まあ、大丈夫ですね。ソリッド・ヴィジョンですから。

十代 LP 4700 3500 3200

「だとしても、フレイム・ウイングマンの効果でダメージ…ってうわ…！」

…フレイム・ウイングマンが私目掛け放った炎が、私に当たらず何かに直撃し、遊城君へと跳ね返った。そしてまた、タライが…。

十代 LP 3200 2600 2300

「そして、メカウサーの効果」

十代 LP 2300 1800 1500

…何故でしょう、悪夢の拷問部屋の効果によるダメージのときには、

何故か全て遊城君の頭上からタライが落ちてくるものでした。しかもそのタライが全て残って床に落ちているという、奇妙な事実。

「…スパークマンで、エクストラ・ヴェーラーを攻撃…」

…スパークマンの攻撃がエクストラ・ヴェーラーを破壊しました。何故でしょうか、遊城君が意気消沈していますね……。

「アハハハ…ターンエンド」

十代 手札3 LP1500

モンスター E・HEROサンダー・ジャイアント×1(攻)、E・HEROスパークマン×1(攻)、E・HEROフレイム・ウイングマン×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1

「私のターン、ドロ…それでは行きますよ。遊城君の場にいるサンダー・ジャイアントとフレイム・ウイングマンを生け贄に、溶岩魔人ラヴァ・ゴーレムを特殊召喚します」

「え！？お、オレのモンスターを！！？」

…遊夜にはいつも酷いと言われるこのカード…フレイム・ウイングマンとサンダー・ジャイアントが溶岩に握られて、消滅し、遊城君が檻に閉じ込められ、下から巨大な溶岩で出来た巨人のようなものが現れた。

「な、なんじゃこりゃー！！」

「ラヴァ・ゴーレムは、召喚ターンに召喚、特殊召喚できない代わりに、相手モンスター2体を生け贄に、相手フィールド上に特殊召喚できます。そして、相手のスタンバイフェイズごとに、相手ライ

フに1000ポイントのダメージを与える効果を持っています。そして、メカウサーを反転召喚。メカウサーの効果でダメージ、悪夢の拷問部屋の効果でダメージ」

「げげ！ぬお…」

メカウサーから電撃が放たれて、それが遊城君に、そしてまたタライによるダメージ…どう声をかけたらいいのでしょうか…。

十代 LP 1500 1000 700

「カードを1枚セット、ターンエンド…次のターン、ライフを回復する速攻魔法が無ければ、遊城君の負けです。さあ、どうですか？」

麗華 手札3 LP4000

モンスター メカウサー×1（攻）

魔法・罟 悪夢の拷問部屋×1、セットカード×1

セットされたカードは、戦闘ダメージを相手を受けるトラップカード、デイメンション・ウォール。これでカードを破壊する効果が発動されない限り、私の勝利はほぼ確実です。

「へへ…」

「？」

「すつげーぜ麗華！こんなにすごいバーンコンボ、今まで見たことが無いぜ！」

「ありがとうございます。それより、遊城君のターンですよ。早めにドローしてください」

「そうだな。行くぜ、オレのターン……ドロー……よし！オレはスタンバイフェイズ、ラヴァ・ゴーレムの効果にチェインし、手札から速攻魔法、非常食を発動！このカード以外にある、オレの

場の魔法・罨カードを1枚墓地へ送り、ライフを1000ポイント回復する！」

「な…ひ、引き当てた!!!?」

そんな…!!遊夜ですら、この状況で…その前に遊夜のデッキって回復系統のカードって入れてありましたっけ…??まさか、引き当てるなんて…墓地へ送られたのはヒーロー・バリアですか。

十代 LP 700 1700

「ですが、ラヴァ・ゴーレムの効果が残っています！」

「!あつつう!!いてえ!!」

十代 LP 1700 700 400

…檻の中にいるのどこからトライが落ちてきたのでしょうか…。

「へへ…それじゃあ、このターンで決めるぜ！」

「な…で、出来るならやってみてください！」

「ああ!やってやるぜ!!オレは手札から壺の中の魔術書を発動し、互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロ！」

壺の中の魔術書…一気に勝負を仕掛けるつもりですね。おそらく、温存しては置いていたようですね。

「そして手札から魔法カード、R・ライト・ジャスティスを発動!オレの場にいるE・HEROの数だけ、フィールド上の魔法・罨カードを破壊する。オレは、そのセットカードを破壊するぜ！」

「!しまった…」

デイモンシヨン・ウォールが…。このままでは、ダメージを…！！

「オレは魔法カード、至高スプレマシー・ペリーの木の実を発動！このカードを発動したとき、自分のライフが相手より下なら自分のライフを2000ポイント回復し、上なら1000ポイントダメージを受ける。オレのライフは400…。そして、そっちのライフは4000！」

まさか、そのような使いづらいカードを…。うまくいけば、大量回復を狙えるカード…。まずいですね…。

十代 LP 400 2400

「そして、融合回収を発動！墓地の融合と融合素材に使われたモンスターを手札に加える。オレは、融合とフェザーマンを手札に加え、融合を発動！沼地の魔神王とスパークマンを融合！現れる！！ダーク・ブライトマン！！！」

「そのモンスターは、貫通効果の…！！」

BGM：GX1期勝利テーマ

「バトル！溶岩魔人ラヴァ・ゴーレムで、メカウサーを攻撃！ええつと…ファイアー！！！」

ラヴァ・ゴーレムを出したことが仇になりましたね…。メカウサーがラヴァ・ゴーレムの炎に焼かれて、消滅した。

麗華 LP 4000 1200

「くう…ですが、メカウサーの効果により、特殊召喚！」

「それじゃあこれで終わりだ！ダーク・ブライトマンで、セツトさ

れたメカウサーを攻撃だー！！ダークフラッシュユー！！」

これほど強いとは…。白と黒の光がセットされたメカウサーを攻撃し、電撃が私へと伝わった。

「キヤアアアー！！」

麗華 LP 1200 0

「ガツチャー！楽しいデュエルだったぜ！！！！」

「フフ…あんな状況から、一気に逆転するとは…中々の腕前ですね」

…出来れば、遊城君は敵に回したくないものですね……それにしても…はあ…。

「（遊夜に…いいところ、見せたかった…）」

（遊夜視点）

「ヘックション！」

「？どうしたつすか？」

「な、なんでもない…」

…誰か噂でもしたのかな…まあ、いいか。それにしても…。

「相変わらずエグイバーンデッキだな…」

「確かにそうね…ん？相変わらず…？それってどういうこと…？」

「ああ。オレと麗華は幼馴染なんだ。だから、麗華の使うデッキは

結構分かっているほうだよ。まあ、今日含めないで最後にあつたと
言えば、入学前の話になるから」

「幼馴染…か」

なんたる、翔が妙に悲しそうな表情をしているような…。

「っていうより、エグイバーンデッキって…原さんのデッキってど
ういうバーンデッキ？」

「ロツクチエーンバーン…結構強いよ。今回は、ロツク要素が来な
かったみたいけどね」

「…まあ、エグイわね。結構」

第09話 転校生 ちなみにレイじゃありません（後書き）

日菜「…まあ、ラヴァ・ゴーレムが今回、かなりエグイかったわね。それじゃあ、今回のキーカード。今回のキーカードはこれよ。」

悪夢の拷問部屋 永続魔法

相手ライフに戦闘ダメージ以外のダメージを与える度に、相手ライフに300ポイントのダメージを与える。

「悪夢の拷問部屋」の効果では、このカードの効果は適用されない。

日菜「バーンカードの中では、追加ダメージを与えられるバーンカードの1枚よ。まあ、バーンデッキの中に入れるか入れないかは本人次第よ。黄泉ガエルとかを使うっていうなら入れないほうがいいとは思わ。」

このカードの強いのは追加ダメージ…今回みたいに、追撃と言わんばかりに連続ダメージ…最大の3枚発動したら戦闘以外のダメージ+900…もはや地獄ね。」

それと、重撃爆禽ボム・フェネクスとこのカードの相性はいいほうよ。」

ただ、このカードの弱点といえば、ダメージが入らなければダメージがないことね。ダメージじゃなくて回復したら使えないわ。ただ、戦闘以外でダメージさえ入れれば効果は発動できるから、連続してバーン効果を使えば大きなダメージを与えることが可能よ。」

それでは、感想、誤字・間違い・良い点、悪い点や、募集企画のオリキャラ投稿を待っています。

V S 万丈目サンダー（前書き）

更新、遅れてすみません。理由は単純に私が執筆をサボっただけです。

遊夜「まったく…それでは、第10話、始まります」

V S 万丈目サンダー

「え？今からデュエルを？」

「そうだ。オレとデュエルしろ、遊夜」

(作者視点)

ノース校との対抗戦から数日：え？飛ばしすぎ？間がほぼアニメ通りである。レイが遊夜の部屋にいて、レイの正体が判明後、麗華による遊夜対象の長時間の説教があったことを除けば。

そして現在、対抗戦にてアカデミアに復帰した万丈目は、遊夜に勝負を挑んできた：無論デュエル。

「まあ、いいけど…デッキを調節したいから、待つてくれないかい？」

「構わない。オレも調節するつもりだったからな。時間は12時だ」

「OK。そのときまでには、デッキ調節を終わらせてみるよ」

遊夜の言葉を聞いた万丈目は、少し笑みを浮かべ、部屋を出た。部屋に残った遊夜は、すぐにデッキの調節に取り掛かった。

「さてと、どんな構築にしようかな」

遊夜が持っているカードを見てみると、不意にPDAからメロディが流れた。快・上昇・ハ　ー　である。

「ん？電話…：もしもし…あ、姉さん。なんか用？…え！そ、それって本当！！じゃあ楽しみに待つておくよ！サンキュー、姉さん！」

…どうやら、姉からの電話で、遊夜は何かを待つようである。

「…もうすぐ12時だな…」

デュエル場にて、万丈目はスタンバイしている。デッキはセットしていないが、スタンバイ済みである。デッキの調節、確認はもう既に終わらせてあり、準備万端の状態でここにいる。

そして現在、ここには何名かの生徒がいる。ある程度噂が流れている程度ではあるが、このデュエルについては噂が少し流れている。おそらく、来ているのは噂をなんらかの方法で聞きつけ、興味を持って来た人物や、暇つぶしにでもと思って来ている人物がいるであろう。

だが、そんな中だとしても、万丈目は冷静であった。

「（今の遊夜は、どれぐらい強いかわからない…常に全力で挑まなければ、確実に負ける）」

万丈目は、全力でデュエルをする…そのことを考えた。でなければ、遊夜相手にデュエルで勝てない、そう考えているようである。そして、時は訪れた。

「ふう、なんとか間に合った…ギリギリでゴメン！」

「構わない。間に合っているからな。それより、さっそく始めるぞ」

そういうと、万丈目はデッキをケースから取り出し、シャッフル後、デッキをセットした。遊夜もケースからデッキを取り出し、シャッフル後、デッキをセットした。そして…。

「デュエル!!!」

万丈目 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「オレの先攻、ドロー!... オレは手札から、マスクド・ドラゴン仮面竜を守備表示で召喚!さらにカードを1枚セット、ターンエンドだ」

万丈目 手札4 LP4000

モンスター マスクド・ドラゴン仮面竜×1(攻)

魔法・罫 セットカード×1

「オレのターン、ドロー!... 沼地の魔神王の効果発動!このカードを墓地へ送り、デッキから融合を手札に加える。そして、手札に加えた融合を発動!手札のE・HEROレディオファイアとワイルドマンを融合し、E・HEROノヴァマスターを融合召喚!」

レディオファイアとワイルドマンの2体が融合し、ノヴァマスターが現れた。遊夜は後攻であるため、このターンから、攻撃が行える。

「バトル!ノヴァマスターで、マスクド・ドラゴン仮面竜を攻撃!フルブーストフレイム!!!」

ノヴァマスターの手から膨大な炎が放たれ、マスクド・ドラゴン仮面竜を焼き尽くした。しかし、炎が治まった後には、マスクド・ドラゴン仮面竜がその場にいる。

「マスクド・ドラゴン仮面竜の効果は、戦闘破壊された場合、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚できる。よって、オレはデッキからマスクド・ドラゴン仮面竜を守備表示で特殊召喚させてもらった」

「じゃあこっちもノヴァマスターの効果で1枚ドロー。そして速攻

魔法融合解除！ノヴァマスターの融合を解除し、レディオブファイアとワイルドマンを召喚！そして、レディオブファイアでマスクド・ドラゴン仮面竜を、ワイルドマンで召喚されたモンスターを攻撃！ダンシング・ファイア！ワイルド・スラッシュ！

「く…仮面竜の効果で仮面竜をマスクド・ドラゴン守備表示で特殊召喚し、さらにワイルドマンによって戦闘破壊された仮面竜の効果により、デッキからアームド・ドラゴンLv3を守備表示で特殊召喚！」

ノヴァマスターの融合が解除され、レディオブファイアとワイルドマンが現れ、レディオブファイアが炎の玉で、ワイルドマンは自身の持つ剣で攻撃を仕掛けた。2体の仮面竜はマスクド・ドラゴン殲滅され、残ったのはアームド・ドラゴンLv3の1体のみである。だが…。

「さらに速攻魔法、マスク・チェンジ！マスク・チェンジは、HEROを生け贄に、生け贄にしたHEROと同じ属性のM・HEROを、融合デッキから特殊召喚する。オレは、E・HEROワイルドマンを生け贄にし、M・HEROダイアンを召喚！」

ワイルドマンの手にベルトが現れ、それを腰に巻き、叩いた。すると、ベルトから光が放たれた。…光が収まると、ワイルドマンが立っていたところには、青のマントをつけ、剣を持つ、白い鎧をつけた戦士が現れた。

「な、なんだそのモンスターは…聞いたことが無いぞ！」

「姉さんがつい最近完成させた、新たなM・HEROさ！それじゃあさっそくバトル！ダイアンでアームド・ドラゴンLv3を攻撃！
デイスバーション！！」

ダイアンが飛び上がり、剣を振り上げた状態で、一気に切り下げ、アームド・ドラゴンLv3を一気に断ち切った。

「さらにモンスターを戦闘破壊したことで、ダイアンの効果が発動する！」

「何？」

「ダイアンは、このモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、デッキからレベル4以下のE・HEROを1体、特殊召喚できる。オレはデッキから、E・HEROフォレストマンを準備表示で召喚！」

ダイアンが剣を振り上げると、フォレストマンが現れ、守備体勢を取った。

「カードを1枚セット、ターンエンド。そしてこのターンのエンドフェイズ、E・HEROレディオブファイアの効果発動。自分フィールド上のE・HEROの数だけ、相手ライフに200ポイントのダメージを与える。オレの場にはレディオブファイアとフォレストマンの2体がいる。よって、400ポイントのダメージ！ファイア・バレット二連射！」

「！く、ならその効果にチェインシトラップカード、奇跡の残照を発動！このカードは、このターン、戦闘破壊されたモンスターを1体、特殊召喚する。オレは墓地から、アームド・ドラゴンLv3を特殊召喚！くう…！」

レディオブファイアから2つの炎が放たれる前、万丈目がカードを発動させ、上のほから光が差し、そこからアームド・ドラゴンLv3が現れた。その後、レディオブファイアから2つの炎が放たれた。

万丈目 LP 4000 3600

遊夜 手札2 LP4000

モンスター E・HEROレディオブファイア×1（攻）、M・HEROダイアン×1（攻）、E・HEROフォレストマン×1（守）
魔法・罫 セットカード×1

「オレのターン、ドロロー！そしてスタンバイフェイズ、アームド・ドラゴンLv3は、自身の効果でLv5へと進化する！」

万丈目の場にいるアームド・ドラゴンLv3が成長し、赤い体と装甲を身につけ、武装した竜、アームド・ドラゴンLv5が現れた。

「さらにマジックカード、レベルアップ！オレの場にいるレベルモンスターを進化させる！オレは、アームド・ドラゴンLv5を、アームド・ドラゴンLv7へと進化させる！」

アームド・ドラゴンLv5でも、しつかりと成長した姿。それがさらに成長し、より強靱な武装を持った竜、アームド・ドラゴンLv7が現れた。

「そして、アームド・ドラゴンLv7のモンスター効果、手札のモンスターを墓地へ送ることで、墓地へ送ったモンスターの、攻撃力以下の相手モンスターを破壊する。オレは、攻撃力2800の闇よりいでし絶望を墓地へ送り、攻撃力2800以下のモンスターを全て破壊する！ジェノサイド・カッター！」

アームド・ドラゴンLv7から2つの巨大な刃が現れ、遊夜のフィールド上に存在しているモンスターを殲滅しつくした。

「！く……」

「バトル！アームド・ドラゴンLv7で、ダイレクトアタック！アームド・ヴァニッシャー！！！」

アームド・ドラゴンLv7が、腕？（もしくは前足）を振り上げてきた。そして、振り下ろした瞬間…。

「ダメージ計算時、ガード・ブロックを発動！ダメージを0にする！！」

遊夜の周りにバリアが現れ、遊夜を押しつぶすが如く迫っていた足を止めた。止められるように見えないが止めた。

「…カードを1枚セット、ターンエンドだ」

万丈目 手札3 LP3600

モンスター アームド・ドラゴンLv7×1（攻）

魔法・罫 セットカード×1

「オレのターン、ドロー！…よし！！オレはE・HEROアイス・エッジを召喚！」

遊夜の場に、白く、水晶のようなものがついているHEROが現れた。

「一気に攻略させてもらう！オレは速攻魔法、マスク・チェンジを発動！アイス・エッジを生け贄に、M・HEROアシッドを召喚！アイス・エッジの手にベルトが…後は殆ど同じであるが、現れたモンスターは、黒っぽい仮面 ダーのようなモンスターであった。

「な、何が出たと思えば、攻撃力2800！攻撃力はアームド・ドラゴンLv7と同じだ！（…それに、オレのセットカードは次元幽

閉：攻撃してきたら、即座にこのカードを発動させる…！」
「…そのセットカード、怪しいね…。アシッドのモンスター効果！
このカードが特殊召喚に成功したとき、相手の魔法・罫カードを全
て破壊し、相手フィールド上の全モンスターの攻撃力を、300ポ
イントダウンさせる！アシッド・レイン…！」

アシッドから毒々しい紫色の液体が放たれた。それは、万丈目のセ
ットカードを溶かし、破壊。さらにアームド・ドラゴンLv7の武
装を少し溶かした。

アームド・ドラゴンLv7 ATK 2800 2500

「な…」

「バトル！M・HEROアシッドで、アームド・ドラゴンLv7を
攻撃！アシッド・ブラスト…！」

アシッドの前に毒々しい紫色の球体が現れ、アシッドはそれをア
ームド・ドラゴンLv7へと飛ばした。アームド・ドラゴンLv7へ
と直撃したその球体は、アームド・ドラゴンLv7の体を溶かして
いった。アームド・ドラゴンの絶叫が響き渡り、破壊された。

「！くううう…！」

万丈目 LP 3600 3300

「これでターンエンド」

遊夜 手札2 LP4000

モンスター M・HEROアシッド×1（攻）

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロ―！強欲な壺発動！デッキから、カードを2枚ドロ―！……行くぞ！遊夜！手札からマジックカード、デュアル・サ二重召喚を発動！これによりこのターン、オレは2回、通常召喚を行える」
「…いつたい、何を…（いや、まさか…）」
「オレは手札から、召喚師セームベルを召喚！」
「え？！」

万丈目の場に、何か生き物を模したような赤い頭巾をつけ、上のほうで結んだツインテールの幼…基、小さい少女が現れた。

「セームベルのモンスター効果、このカードが表側表示のとき、このカードと同じレベルのモンスターを、1度だけ特殊召喚できる。

オレはセームベルと同じレベル2のおじやまいエローを、守備表示で特殊召喚！」

『参上…あれ？万丈目のアニキ、なんだかピンチじゃない？』

「黙れ。オレは、セームベルとおじやまいエローを生け贄に…」

『え？ちよ、オイラってここまでえ〜！！？』

「（…なんだろ、おじやまいエローの悲痛な声が聞こえたような…）」

セームベルとおじやまいエローが消えた（おじやまいエローのみ、悲痛な声を上げた）。そして、現れたのは…半身が白、もう半身が黒…光と闇を名に持ち、その身に2つの属性を宿す、竜が現れた。

「現れる！光と闇の竜…！！」
ライトアンドダークネス・ドラゴン

「…！ら、光と闇の竜…で、でも…アシッドは攻撃力と同じ、280

0。まさか、相打ちとでもいうんじゃないよね」

「（すまない、光と闇の竜…）バトル！光と闇の竜で、M・HER

Oアシッドを攻撃！ダークバプティズム…！！」

ライトアンドダークネス・ドラゴン

光と闇の竜から、黒い炎が放たれ、アシッドへと直撃した。しかし、アシッドもただではやられるかともいうかのように、小さい紫色の球体を作り、それを光と闇の竜へと放った。そして、2体は破壊された。

「く……！（しまった……）」

ライトアンドダークネス・ドラゴン

「その表情だと、何か気付いたようだな。だが、遅い！光と闇の竜の、モンスター効果！このカードが破壊され、墓地へ送られたとき、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択し、自分フィールド上の全てのカードを破壊し、選択したモンスター1体を、自分フィールド上に特殊召喚する。オレは、アームド・ドラゴンLv5を特殊召喚！」

不意に、強烈な光と闇が現れ、万丈目の場に満たされた。その2つが収まったとき、万丈目の場にはアームド・ドラゴンLv5が存在していた。

「行くぞ！アームド・ドラゴンLv5で、ダイレクトアタック！アームド・バスター！！」

アームド・ドラゴンLv5が、腕をブンブンと振り回し、攻撃してきた。遊夜は何か危機的なことを感じたのか、かわした。

遊夜 LP4000 1600

「ターンエンドだ（一時はどうなるかと思ったが……ここまで追い詰めた……だが、油断はならない……だが、このターンを凌げれば、まだチャンスはある……）」

万丈目 手札1 LP3300
モンスター アームド・ドラゴンLv5×1(攻)
魔法・罠 なし

(遊夜視点)

…まずい。手札に融合関連のカードがない。その上、E・HEROは、上級モンスターといえるモンスターが殆ど融合モンスター。今のデッキに、手札から召喚できるE・HEROの上級モンスターは一切デッキに入れていない…。こうなったら、このドローにかけるしかない…！

「オレのターン、ドロー！……………え？」

…いや、さ…うん、オレのドロー運で融合来ないとは思っていたけど、もしかしたらドロー補助来るかもしれないとは思っていた…でも…。

「(よ、よりもよって、エフェクト・ヴェーラー引いちゃった…)」

この状況下で…ないよりマシだろうけど、まさかこのカードが来るなんて…。仕方ない。

「(手札には幻影の魔術士がいる。上手くいけば凌げる)オレはモンスターをセット、ターンエンド」

遊夜 手札2 LP1600
モンスター セットモンスター×1

魔法・罫なし

「行くぞ、オレのターン、ドロ―！…オレは手札からマジックカード、天使の施しを発動。デッキからカードを3枚ドロ―し、2枚を捨てる」

ここで天使の施し…。ああいうカードが来てほしかったな、本当に…。…？少し万丈目が笑ったような…。

「さらに手札からマジックカード、壺の中の魔術書を発動！互いのプレイヤーは、デッキからカードを3枚ドロ―する」

ドロ―カードが2枚も…。この状況にさらに追い討ちをかけるようなカードが来そうで怖いな…いや、多分来る。手札補充が出来たのはいいとして、追い討ちをかけるカードが来る。

「オレは手札からレベルアップ！を発動！！その効果により、アームド・ドラゴンLv5を、アームド・ドラゴンLv7へと進化させる！！」

ま、また来たよアームド・ドラゴンLv7…でも、まだLv7なら大丈夫…Lv7なら、まだ…。

「行くぞ！これが、このデッキに入っているカードの中で、もっとも攻撃力が高いモンスターだ！！オレは、アームド・ドラゴンLv7を生け贄に…アームド・ドラゴンLv10を、特殊召喚！！！」

で、出た…最強のアームド・ドラゴン…見た目はどう説明したらいいか…うん、凶悪武装の巨大竜って説明が手っ取り早い…大雑把だろうけど。

「さらにマジックカード、大振動を発動！相手フィールド上のモンスターを全て、表側守備表示にする！」

「な…！！！」

だ、大振動…地味だけど強力…この時代にレッドデーモンズがいたら、間違いなくこのカードとのコンボが組まれる。うん、地味な効果だけど充分恐ろしい。そうこう思っているうちに振動によって、オレのセットモンスター…幻影の魔術士の姿が、露わになった…守備体勢だけど。

「そして、アームド・ドラゴンLv10のモンスター効果！手札を1枚墓地へ送ることで、相手の表側表示のモンスターを、全て破壊する…！」

「！さ、させるか！！オレは手札からエフェクト・ヴェーラーを墓地へ送り、効果発動！相手ターンのメインフェイズにしか使えないけど、相手モンスターの効果を無効にする…！」

「！そのカードは、入試のときに、クロノス教諭の古代の機械巨人アンティーク・ギア・ゴーレムの効果を封じたカードか…！」

うん、正解。オレがエフェクト・ヴェーラーの効果が発動したとき、不意にオレの近くにエフェクト・ヴェーラーが現れた。そして、掌に光を集めた。

『マスターのために、その力無効にさせてもらいます…！！』

「…え？」

…今、何か聞こえたような…というか、エフェクト・ヴェーラー…喋らなかつた？今、喋らなかつた？オレと、多分万丈目が驚いた表情をしていると、多分無効化されたからか、さっきより気迫が弱ま

ったような気がする…。そこまで差があるか分からないけど。

『マスター、がんばってくださいね!』

「え、えっと…う、うん」

そう言つて、エフェクト・ヴェーラーは消えていった。…うん、何が起きたんだろ、マジで何が起きたんだろ…。

「…は!こ、効果が無効にされたからといい、攻撃できないわけではない!バトル!!アームド・ドラゴンLv10で、幻影の魔術士を攻撃!!アームド・ビック・バニツシャー!!」

アームド・ドラゴンLv10が、思いつきり幻影の魔術士を殴り飛ばした。無論、破壊された。でも、これでいいかな。

「幻影の魔術士のモンスター効果、このカードが戦闘によって破壊されたとき、デッキから攻撃力1000以下のHEROを、表側守備表示で特殊召喚できる。オレはデッキから、E・HEROフォレストマンを特殊召喚!!」

「し、しまった…ターンエンドだ」

万丈目 手札0 LP3300

モンスター アームド・ドラゴンLv10

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロロー!フォレストマンの効果で、デッキから融合を手札に加え、発動!手札のボルティックとフォレストマンを融合!来い!E・HEROガイア!!」

オレの場に、こげ茶色の大型のHEROが現れた。さあ、一気に決

める！！

「ガイアのモンスター効果！このカードが召喚に成功したとき、相手モンスター1体の攻撃力を半減させ、そのモンスターの、攻撃力の半分を、このモンスターの攻撃力に追加する！」

「な…強力な攻撃サポートカード、フォースと同じ効果を、召喚時に発動するだ…！」

まあ、フォースは確かに強いからね…。ガイアの効果が発動すると、ガイアが両腕を地面に叩きつけた。すると、アームド・ドラゴンが小さくなり、ガイアが大きくなった。

アームド・ドラゴンLv10 ATK 3000 1500

E・HEROガイア ATK 2200 3700

「さらに装備魔法、ジャンク・アタックを、ガイアに装備！ジャンク・アタックを装備したモンスターがモンスターを戦闘によって破壊した場合、破壊したモンスターの、攻撃力の半分を、ダメージとして相手ライフに与える！」

「な…何…オレのアームド・ドラゴンの攻撃力は3000…そして、ガイアの攻撃で確実に2200ポイント与えられる…ということは…」

そう、これで終わり…。ガイアの周りに、何かの欠片が浮遊し始めた。それじゃあ、一気に決めよう！

「これでフィニッシュだ！バトル！！E・HEROガイアで、アームド・ドラゴンLv10を攻撃！コンティネンタル・ハンマアアアアアアア！！！！」

ガイアが大きく飛び上がり、腕を振り上げ、その腕を、アームド・ドラゴンLv10へと叩きつけた。アームド・ドラゴンLv10は、一気に破壊された。

「くううううううー!!」

万丈目 LP 3300 1100

「そして、ジャンク・アタックの効果で、アームド・ドラゴンLv10の攻撃力、3000の半分：1500ポイントのダメージを受けてもらっよ」

「!うわああああ!!!」

万丈目掛け、ガイアの周りに浮いていた欠片が放たれた。その中に、アームド・ドラゴンの武装の破片が混じっているような気がした。

万丈目 LP 1100 0

デュエルが終了して、ソリッド・ヴィジョンが停止して、ガイアが消えていった。万丈目は、仰向けに倒れている。その表情は…何かスッキリしたような感じだった。

「フフ…最高のデュエルだったよ」

「ハハハ…確かにだ。ここまでスッキリした気分になれるとはな…」

オレは万丈目の元へと歩いていった。万丈目も、オレが近づいてきて、自力でしっかり立ち上がった。そして、オレと万丈目は握手を

かわした。

「前以上に、確実に強くなったね」

「もちろんだ。お前も、しっかりと強くなっているようだな」

オレだって何もしていなかったわけじゃない。まあ、ここまで行けたのは、姉さんのおかげかな。このタイミングでダイアンとアシッドを手に入れたことが、今回の勝利に繋がったかな。

「遊夜……！」

「ん？麗華！」

麗華、見に来てたんだ。十代達がやけに後方に見える……。麗華ってどれぐらい足速かったっけ……？

「相変わらず予想を上回るデュエルだった……でしたね！」

「ありがとう。それと、喋り方なら無理しなくてもいいけど……」

「そ、そういう訳にはいきません。いくら遊夜が幼馴染だとしても、遊夜だけ特別扱いにする訳にはいきません」

「そういうところ頭固いな。呼び捨ては別にいいみたいだけど」

「二人称は人の自由です！」

まあ、確かに。二人称は自由……っていうかそれを言ったら多くのことは自由だとは思っけど……まあそれはいいか。

「な、なんとか追いついた……」

「は、原さん速いっす……」

「追いつけなかったんだな」

十代達が追いついてきたか……。麗華どれぐらい速くなったんだろ、

オレが見ない間に。あ、そうだ。

「万丈目、聞いていいかい？」

「？なんだ」

「ソリッド・ヴィジョンのエフェクト・ヴェーラーから、声聞こえなかった？オレに語りかけたりした声とか」

「ああ、バツチリ聞こえた。…十代、デュエルの途中で、オレ達以外の声が聞こえなかったか？」

「え？…さあな…相棒に聞いて…って、分からないんだ…」

…まあ、観客席とデュエルフィールドじゃあ、意外と距離があるから、聞こえなくても不思議じゃないかな。そして、オレは小さく溜め息をついた。

「…あの声は、なんだったんだろ…」

オレがそう呟いたとき、微かに…エフェクト・ヴェーラーが見えたような気がした。

V S 万丈目サンダー（後書き）

日菜「かなりいいデュエルだったわね。それと、新しいM・HER
Oも登場したしわね。あたし出てないけどね。それじゃあ今回は：
オリカ紹介とキーカードね。今回紹介するオリカは…」

大振動 通常魔法

相手フィールド上のモンスターを全て、表側守備表示にする。

日菜「万丈目が使ったオリカ、大振動。あまり使えるタイミングが
無い1枚ね。まあ、今回みたいに表側表示にしたい場合に使えるオ
リカね。それと太陽の書とかを使わなかった理由は、デュエルの展
開上、守備表示の状態じゃなくちゃデュエルが終わるから、このカ
ードを急遽作り出したらしいわ。それじゃあ次に、今回のキーカー
ド。さて、今回は…」

ライトアンドダークネス・ドラゴン

光と闇の竜 ドラゴン族・効果 光属性 星8 ATK

2800 DEF 2400

このカードは特殊召喚できない。

このカードは、闇属性として扱う。

このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、効果モンス
ターの効果・魔法・罫カードの発動を無効にする。

この効果でカードの発動を無効にする度に、このカードの攻撃力、
守備力は500ポイントダウンする。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するモ
ンスター1体を選択して発動する。

自分フィールド上のカードを全て破壊し、選択したモンスター1体
を特殊召喚する。

日菜「万丈目のエースの1体、ライトアンドダークネス・ドラゴン光と闇の竜。カードの発動を無効に

して攻守500ポイントダウンと、破壊され墓地へ送られたときに自分の墓地からモンスターを1体選択して、自分フィールド上のカードを全て破壊して、選択されたモンスターを特殊召喚する効果、それと闇属性としても扱う効果を持つドラゴン族の上級モンスター。カードの発動を無効にするから、一部のカードは大抵このカードの効果でいけるけど、チェーンを組まれたり、攻守のダウン限度までいくと効果を使えないし、永続魔法、永続罫を発動しても、破壊されるわけじゃないから残る…でも、この効果の有効利用方法は、攻守のダウン限度のときに禁じられた聖杯で効果を無効にした上で、ダウンした数値を元に戻す、あまのじゃくの呪いでダウン数値をアップ数値に変えて、攻撃力を元々の2倍クラスにしたりと、いろいろ出来るわ。

特殊召喚効果は、このカード事態特殊召喚できないっていう効果があるから無理。特殊召喚するのは、今回万丈目が使ったように上級モンスターがオススメね。これを使うには墓地肥やしが案外シナジ「するわね」

次回の投稿は来年で、セブンスターズ編開始を予定しております。それでは、感想、指摘、オリカ投稿や企画に関する投稿等をお待ちしております。

それでは皆さん、良いお年を！

第11話 七つの星々、輝く 遊夜の精霊も…？（前書き）

読者のみなさん、あけましておめでとございます！
今年もよろしくお願いします。

遊夜「今回はセブンスターズ編開始だけど、デュエル無し…描写も
ほぼ無し。そして、オレの精霊も輝く…って、よく分からないけど
…。

第11話 七つの星々、輝く 遊夜の精霊も…？

「…セブンスターズ…ですか」

「そうです。彼らは、この七星門の鍵を狙ってくるはずですよ」

(遊夜視点)

オレと万丈目とのデュエルから数日後…オレ、十代、天上院さん、万丈目、三沢、黒夜さん、カイザー、クロノス先生、引率的な感じであつた大徳寺先生が、校長室に集まっている。三幻魔についての話を聞いた。そして、七星門の鍵についても…。

「鮫島校長、聞いてもよろしいでしょうか？」

「？三沢君、なんだね？」

「鍵を消失させるという手段は無いのですか？」

「ふむ、消失…ですか」

…確かにそれが一番手っ取り早い方法…のはず。その質問に答えるためか、校長は苦笑を浮かべた。

「我々もやってみましたが…まず、溶岩へと落としましたが、何故か溶けずにすぐ手元に戻り、埋めてみましたが、またすぐ手元に戻り、コンクリートで固め、海へと沈めてみましたが…何故かコンクリートで固める前の状態ですぐ手元に戻りと…多くの方法を試してみましたが、どれも無駄でした」

「な、なるほど…。そうになると、七星門の鍵はすごいですね…」

七星門の鍵とただけすごなんだよ。コンクリ固めた状態で海に沈めたのにすぐ戻るって、とんだけなんだよ。オレが心の中で突っ込む

と、カイザーが口を開いた。

「では、七星門の鍵は、どのようにしたら相手は手に入れることが？」

「それですが、まず…手に入れること自体は、直接的かつ単純な方法で、奪ったり、渡されたりすることによって入手可能です。それ以外の方法で可能としたら、デュエルでしょう」

「デュエル…ここらしい方法ですね」

「はい。そしてそれが七星門を開けるための鍵の入手方法です」

「つまり、相手はデュエルで勝利しない限り、鍵手に入れても無意味なことですよな」

「そうなりますね」

まあ、確かに。アニメのほうでも、黒蠍の盗賊達が盗んで意味無かった描写があつたし。

「つまり、セブンスターズは、私達から鍵を奪うためにデュエルを挑む…そしておそらく、実力はかなり高いと考えられると、考えてもいいでしょうか？」

「おそらくですが、そう考えられるでしょう。それと1つ…セブンスターズは、いつデュエルを挑んでくるか分かりません。常に準備を怠らないでください」

「ツマヽリ、セブンスターズヽハ、神出鬼没でいつ現れるか分からないということ合ってますーカ？」

「そうです。ただ、おそらくセブンスターズは、あまり目立つことを避けて、暗いときにデュエルを挑んでくるかもしれませぬ」

暗いときにデュエルを…。まあ、だとしても、勝つだけかな。……？

「あの、鮫島校長…七星門の鍵は、名前からして7つあると思った

のですが…9つありますね」

「それについて、説明がしていませんでしたね。確かに、従来の七星門の鍵は7つです。そして今回、この中にダミーを2つ紛れ込ませてあります。どれがダミーかは、お教えすることはできません」

ダミーが混じっているのか…。誰がダミーを引くかは、もしかしたら校長にも分からないかもしれない。

「ふーん…まあ、鍵は適当に選ばばいいんですよ。…そして、おそらく選ぶのは校長以外のこの部屋にいる人間ですか？」

「はい。君達ならきつと、鍵を守れると信じています」

「それにしても、セブンスターズか…。(6人目がアニメと違うことを祈っておきたいな…)」

鍵を受け取ってから数時間後…オレは鍵を、机の引き出しの中に隠して、ベッドの上で寝転がり、エフェクト・ヴェーラーのカードを一応見ていた。それにしても…。

「…あのとときの声って…なんだったんだろな…」

万丈目とのデュエルときに聞こえた声…あの声……やけにかわいらしかったな。あの声に似ているといえば……。

「(…青の魔の確か……ダメだ、まったく思い出せない。…特徴としてプロポーションいいのは何故か覚えてくれるけど…)」

なんだろう、確か、ニイって鳴いているヤツ使う子だとは思っけど…

ダメだ、思い出せない……。まあ、いいか。オレはエフェクト・ヴエラーのカードを腰にあるデツキケースへとしまった。このまま寝たら確実にアウトな状態になる……。

数分経ち、このまま寝ようと考えた瞬間、何故かオレの意識が飛んだ。

……ん……。なんだか、背中の方がやけにザラザラしてるような……。それに……。なんだか、汗っぽい感じが顔にあるような……。

「……………？…暑い……………ってあつうつう！！！！」

「あ！流明君やつと起きたっすか！」

「今大変なんだな！」

「見て感じて分かるよ！！何ここ！気温何度！後マグマ見えるよ、ドロドロが見えるよ！！完璧に火山じゃないか！！！！っていうかなんでこんなことにいるのオレ達！」

「それはボクも聴きたいくらいっすよ！！いきなり気が遠くなったと思ったら、いきなりこんな状態っす！！」

「オレもなんだな。というよりもここものすごく暑いんだな！当たり前前だけど」

「……………とりあえず、今何が起きてるのか説明を求めよ」

なんだかこの状況、見覚えあるような……。それと、周りに透明なバリアみたいなものがある。そして……。向こうで十代と見覚えのある人がデュエルをしていた。オレがある程度周りを確認したところで、翔が話しを始めた。

「はっきり言えば……。アニキがダークネスって人とデュエルしてるっす……。そしてアニキが負けたりしたり、時間切れになったら……」

『あ、気がつきましたか？マスター』

…ここはいつたい…なんだか、目の前にいるエフェクト・ヴェーラーとオレ以外何もなさそうな、白い空間…？

「…えっと、君は？」

『はい！私はマスターの持っている、エフェクト・ヴェーラーのカードに宿る、エフェクト・ヴェーラーの精霊です！』

「…着ている物も髪の色も黒の人とデュエルしたとき、君…いた？」

『はい。さらに言うと、以前、マスターが闇に飲み込まれそうになる少し前に、こちらの世界に来ました』

「闇ってというと…あ、もしかしてあの時エフェクト・ヴェーラーが光ったのって、君のおかげ？」

『そうです！でも、少し慌てていたので、やり過ぎたかもしれませんけど…アハハハ…』

や、やり過ぎたって、あれでやり過ぎ？

「充分だつて。おかげで助かったし…とにかく、ありがとう」

『エヘヘ…どういたしまして…それにしても、やっとマスターとゆっくり話せる機会ができました！』

「…まあ、確かに…どのタイミングもゆっくり話せた訳じゃないし…」

『私こう見えても、マスターをずっと見てました！』

「…？どういうこと…？」

『私、こちらの世界に来たのはいいですけど、しばらくの間、何故かカードから出られずにいました。でも、その服も髪の色も黒い人とのデュエルのとき、なんとかカードから出られました！…その後は、何故か出られませんでしたけど…』

そ、そうなんだ…。それにしても、なんか元気な子だな。…失礼だろうけど、一応聞いとこうかな…。

「ねえ…1つ聞いてもいい？」

「何をですか??？」

「…女の子…だよな?多分」

「???そうですけど…ハ!む、胸で判断しないでください!」

「いや…女顔の男だったらどうしようかと思って…」

「…確かに、マスターの顔…少し女の子みたいですね」

「悪かったね女顔で」

「あ、えーっと、すみません…」

女顔ってことは自覚してるけど、指摘されるとムカつく…。オレは立派な男だー!!!

『あ、あの…』

「?何??」

『…まだ怒ってます?』

「全然怒ってないけど?」

『ならいいですけど…その、もうそろそろマスターの目が覚めると思っています』

「え?」

『マスターの目が覚めると、マスターは自動的にこの空間から出られます。それと、私も』

「君が出たら、この空間は?」

『まあ、これは私の魔力で作りに出した空間なので、いつでも作り出せますよ』

…この空間、この子が作ったんだ。でも、やっぱり白いな…。

「…空間を作り出せることって、すごいことなの？」

『えっと…この空間自体、現実の空間にある訳ではないので、私はまだ、全然…あ、でも空間を作り出せること自体は、すごいことです！ブラック・マジシャンのマハード様は、現実の、それもマスターのいる世界でも、確か…半径100km以内は可能だつて、マハード様のお弟子さん、ブラック・マジシャン・ガールのマナさんは言っていました！マナさんはできないそうですけど…』

「へ、へー…他に空間を作り出せるって人は？」

『えっと、空間自体を作り出せる人は多くいますけど、マスターのいる世界でも空間を作り出すことが可能なのは…私の住んでいた魔法族の里には…若里長の闇紅の魔導師さんが作り出せます。』

後、多くの魔法使い族が集まる魔導都市、エンディミオンには…マハード様を含め、大勢いるそうですが、中でもその都市を統べる神聖魔導王である、エンディミオン様がもっともすごいというお話です。なんでも、マハード様の5倍以上の空間を作り出せるそうです。それに、エンディミオン様のみが使える魔法が、いくつもあるそうです』

エンディミオンすごいな…。っていうかブラック・マジシャンのマハードって、もうファラオの記憶編で出てきたあのマハードかな…それと、ブラック・マジシャン・ガールのマナって、そっちもあのマナじゃないか？

『ただ、世界にはもっとすごい魔術師：マハード様やエンディミオン様よりも強く、すごい…伝説の魔術師がいるという話があります』

『d』

「伝説の…魔術師？」

『はい。でも、その魔術師についてのお話はまた今度です』

「？」

『もう現実のマスターが目覚めると思いますが』

…そういえば、視界が徐々に白くなってきているような…。

『マスター、またゆっくりお話ししましょうね!』

エフェクト・ヴェーラーのその声を聴いたところで、オレの視界は全て、白くなった。

「ゆ……!ゆ…や!!」

…声が聞こえる…。聞き覚えのある声が…。声からして、女子…聞き覚えのある、声…かなり前から聴いている、女の子の声…。

「ん……ん？」

「!遊夜!!よかった、気がついて…」

…れ、麗華…。麗華が涙目になるところ、久しぶりに見たような…。それにしても、ここは……もしかして…。

「…麗華、さっそく1つ聞いていいかい？」

「何？」

「…ここは保健室？」

「うん」

かなりスムーズに答えたな…。でも、なんでオレ…ここに？

「麗華、いったい何が？」

…丸藤君から聞いた話だと、昨日の夜遅く、遊夜が気絶して、し

しばらくしても目を覚まさなかつたから、すぐにここに運んだと、言っていました」

「……………昨日か……………授業は？」

「今日は休みだから大丈夫」

「なるほど……………」

翔、うまく理由をごまかせたみたいかな……。それにしても、鍵を持っているのに人質になつたつてことは…アレ偽物かな…？

「えつと…大丈夫？」

「うん。ピンピンしてるよ。ただ気絶してただけだろうから」

「よかった……………」

麗華…意外と心配性なんだよな、昔から…。…？

「ねえ、ベッド…他にも使われてる？」

「うん。遊城君、それと…天上院さんのお兄さんが」

「…十代の調子は？」

「悪いみたい…丸藤君と前田君の話だと、体力を消耗しきつた状態だつたらしいわ」

…闇のデュエルの影響かな。しばらく、十代を動かす訳にはいかない…。それに、このまま行けば次は彼女…。仕方ない、頼むか。

「麗華、オレの携帯は？」

「携帯なら、そこにかかっている上着の胸ポケットに入ってる」

「分かった。ありがとう」

胸ポケット…しっかりと携帯が落ちないようにしておいてよかった。

「そういえば、鮎川先生は？」

「少し仮眠を取ると言っていました。あ、それと…遊夜は起床次第、体調が悪くなければ保健室を出てもいいと言っていました」

「それじゃあ問題ないよ。気分悪くもないし」

「でも、心配なので、その…部屋まで着いていきます」

「…トイレ行くけど」

「待ちます」

…本当に心配性だな…。まあ、いいか…。

保健室を出て、トイレに入った…そして、個室へと入った。そして、携帯を使い、ある人物へと電話した。

「急に電話をかけてごめん。早速で悪いけど……デッキを借りたいんだけど…」

カミューラ相手じゃ多分…オレの戦術はとことん潰される。十代を動かしたくない以上、オレがカミューラを倒す。そのために、アイツのデッキを借りる必要がある。ただ、あのデッキは少し問題があるけど……まあいいか。

「……お、サンキュー。…え？オレだから貸す？オレは信用できるから…なるほどね。あ、それと…デッキに入っているカード、全部紙にリストアップして、その紙をデッキと一緒に送ってほしい…うん、ありがとう」

オレは電話の相手にお礼を言って、電話を切った…さて、カミューラ戦までに届けばいいけど…。

第11話 七つの星々、輝く 遊夜の精霊も…？（後書き）

日菜「…最後誰にデッキ借りようと考えたのよ。っていうかカミューラ対策ならカーテンでどうにかなるか、メインデッキ誰かに預けるか、どこかに隠しなさいよ…。まあ、コウモリどこで見てるか…もしかしたらもう見られてるかもしれないけど…どうなるか分からないから、それぐらいの警戒はしたほうがいいかもしれないけど、自分のデッキを信じる気持ち足りないんじゃない？

まあ、グダグダ言っても何も始まらないから、今回もある、キーカード紹介。今回のキーカードは…」

エフェクト・ヴェーラー 魔法使い族・効果/チューナー 光属性
ATK 0 DEF 0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする。この効果は相手ターンのメインフェイズ時のみ発動できる。

日菜「エフェクト・ヴェーラー…今回出てきた遊夜の持ち精霊ね。カードとしての効果は、比較的優秀よ。手札から発動するから、奇襲性に富んでるし、効果を無効にすることで、召喚時に発動する効果や、召喚時に攻撃力の上限が決定するモンスターに対し使うとかなり有利な状態にもすることも可能な、ガーゼット涙目のモンスターよ。」

弱点は相手ターンのメインフェイズにしか使えないこと。相手ターンでもメインフェイズにしか発動できないから、発動可能範囲が結構狭い。まあ、自分のターンにも発動できたら準制限か制限行くわ

ね
「

2012年最初の投稿。次回はカミューラ戦まで飛びます。遊夜は
いったい、どんなデッキを借りたのでしょうか…。
それでは、感想、指摘、誤字訂正、企画等を、今年もお待ちしてお
ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621x/>

遊戯王GX ~ HERO ' s F e l l o w s ~

2012年1月2日00時51分発行